

5 移行期のインド洋経済圏におけるアフリカ人の移動

北川 勝彦

Katsuhiko KITAGAWA

1 序 —本研究の目的と課題—

現在、著しい経済発展をとげつつある中国とインドは、アフリカに対する貿易と投資に新たな関心をよせている。地球上においてもっとも貧しい3億人が暮らし、現状を打開するために身のすくむような困難な経済開発の課題に挑戦しようとしているアフリカにとって、21世紀における「アフリカのシルクロード」¹⁾が築けるかどうかは、成長とグローバル経済への参入の機会となる鍵を握っているようにも思われる。中国とインドによるアフリカとの「南南関係」の構築は、アフリカにおける天然資源の開発と財貨やサービスの生産力の向上という経済のレベルだけではなく、社会や文化のレベルにまで及ぶであろう。しかし、今日、これらの諸国と諸地域の間には著しい不均衡が存在するために、多様な関係の改変が必要とされる。

この研究には、過去にアフリカ大陸を離れて異なる地域で生きてきたか、あるいは今もなお生きているアフリカ系人が、今日のグローバル化現象のなかで各地域で生じている多様な政治的、経済的および社会的変動をどのように受け止め、みずからの生活を切り開こうとしているのかについて考えようとするところに狙いがある。これまでアフリカ系人ディアスポラの移動に関する研究は大西洋を舞台として展開された歴史を主とするものであった。本研究は、最近ようやく注目されるようになったアジアにおけるアフリカ系人ディアスポラという現象を理解する上で必要不可欠な歴史的背景に焦点をあてて検討することからはじめられた²⁾。

一般的には、アフリカ系アメリカ人 (African American) 社会と比較して、アフリカ系アジア人 (Afro-Asian) 社会のプレゼンスは識別しがたい。もっとも可視的なアフリカ系アジア人は、19世紀と20世紀に奴隷としてアジア各地に「輸入」されたアフリカ人の子孫である。奴隷は、解放されると完全な市民権を得た場合もあるが、それは例外的であって、現地の社会が彼らに目を向けることは少なかった。たとえば、

事の真偽はともかくとして、スリランカでは、奴隷解放に続いてキャンディ人 (Kandyans) が6000人の「カフファー」(Kaffirs)を殺害したという記録もある³⁾。多くの場合、かつての奴隷は、社会では劣等なメンバーとして組み入れられるか、または子々孫々に至るまで召使の地位に留められた。これは、一部には彼らの経済的な立場の弱さに由来する。

ポスト奴隷制経済に移行すると、かつての奴隷所有者が供与した生活面での「保護と援助」がなくなることも彼らの苦境を深めた。一例をあげると、ハイデラバードのアフリカ人は、アジアの他の地域の奴隷と同様に、地理的に孤立した場所に住み、社会的地位も低く、主として奉公人の仕事についていた。多数の奴隷は、解放後、地方の労働市場に投げ出された。その結果、雇い主は安価な被雇用者を確保できたのであるが、容赦のない市場原理の下で多くの元の奴隷は賃金労働につくことができなかった。「シリク」(Sirik)といわれるアフリカ系イラン人、グジャラート (Gujarat) においてはギル (Gir) や西ガート (Ghat) の森に暮らす「シディ」(Sidi)、それに加えて元はと言えばモーリシャスの奴隷であった「クレオール」(creoles)などは、まったく社会の周辺に追いやられ、心もとない収入で生計をたてる他に生きるすべはなく、経済の後退や自然的災害に直面したときには著しく弱かった。こうした人々にとって、近代資本主義経済の下で得られた「自由」は、「奴隷制」と比べて何も物的な保障をもたらさなかったのである⁴⁾。

現在のアフリカ系アジア人社会は多少可視的になったとは言え、歴史的な記録を丹念にたどらなければその所在は判明しない場合が多い。たとえば、1616年から1760年まで、アフリカ出身のシディの水夫が、ボンベイの南45マイルにあるジャンジラ島からインド西岸にかけて暮らし、1872年のセンサスでは1700人のうちで15%がシディとして登録されていた、という記録もある⁵⁾。また、アフリカ系アジア人社会の過去と現在は、地理上の地名から推定されることもある。1890年代末のイランでは、バンドル・アバス (Bandar 'Abbas) —19世紀におけるアフリカ人奴隷の主要な輸入地—のアフリカ人の居住地は、「ブラック・クォーター」(Black Quarter)と呼ばれた。もともと古くからアフリカ人が居住していたところは、「ザンジアバード」(Zanjiabad、アフリカ人によって建てられた村)、「デア・ザンジアン」(Deah-Zanjian、アフリカ人の村)などの名前で呼ばれた。また、バルキスタンでは「ガラ・ザンジアン」(Gala-Zanjian、アフリカ人の城)といわれ、スリランカのプッタラマでは「カピリ・ガマ」(Kapiri Gama、カフファーの村)はアフリカ系シンハラ社会を意味した⁶⁾。

ハイデラバードの「シディ・リサラ」(Sidi Risala)として知られる地域には、19

5 移行期のインド洋経済圏におけるアフリカ人の移動

世紀末にアフリカ人を主力とする騎兵隊がおかれていた。1970年代の初頭には、彼らの子孫2000人がなお暮らしていたようである。この地域の初期のアフリカ人社会は、「シディベット」(Siddipet、アフリカ人の市場)とか「ハブシ・グダ」(Habshi Guda、アフリカ人の村)などと呼称されてきた。「カニズ」(Kaniz、奴隷の少女を示すペルシャ語)は、北グジャラートのアナンド近辺の小都市で、かつてはそこには奴隷の仮収容所があった⁷⁾。「シド」、「シディ」、「フブシ」は、インドにおけるアフリカ人の子孫の集団を表し、スリランカでは、「カフパー」がアフリカ系シンハラ人社会を表している⁸⁾。モーリシャスでは、かつて奴隷であった人々は、インド、中国、ヨーロッパとは異なり、さまざまな社会に分散した。このようにマダガスカルを加えるとアデンからスリランカにいたる沿岸に弧を描くようにアフリカ出身の奴隷が形成した社会として識別できるものが存在することになる。また、バスの研究によれば、アフリカ系インド人は64000人で、シンドに30000人、グジャラートに10000人、ハイデラバードに12000人、カルナタカに12000人が居住すると報告されている⁹⁾。表1は、現在までに知りえたアジア各地におけるアフリカ系人の呼称をまとめたものである。

ところで、近年の歴史研究においては、大陸に関する研究は言うに及ばず海洋(島嶼を含む)の研究が広く行われるようになった。社会経済史研究においても「大陸アジア」と区別して「海洋アジア」という分析概念が定着してきた。それとともに海洋を舞台とした文化交流圏(cross-cultural)および文明交流圏(cross-civilizational)などの新たな概念が歴史研究(海洋史研究)に重要な位置を占めつつある¹⁰⁾。

本研究の目的は、以上のような研究動向を踏まえながら、広く世界史における海洋世界ないし海洋システムの歴史的役割と海洋を舞台として展開されてきた人・もの・金・情報の移動の歴史とその分析枠組みについて理解を深めようとするところにある。その場合、本研究では、現代のアジアにおいてアフリカ系人ディアスポラが存在するに至った歴史的背景を知るために16世紀～19世紀のインド洋交易システムの変動期あるいは移行期において現れたアフリカ人の移動とその結果生まれた「離散共同社会」(diaspora community)およびそのネットワークの形成に注目する。それを考察するにあたって、アフリカ人が何故に出自社会を離れ、海洋アジアにむけて移動したのか、そのプロセスはどのようなものであったのか、また、彼らは、アジア人とどのように遭遇し、移動した社会においてどのような経験を共有したのかなど、具体的に検討すべき課題は多い¹¹⁾。

本稿では、以上のような問題意識に立って次のような問題を順次検討し、今後考察すべき課題を設定することにしたい。まず、アフリカ人のアジアへの移動の前提条件

表1 アフリカ系アジア人社会に対する呼称

地域・国	呼 称
マダガスカル	Masombika, Makoa, Zazamanga
モーリシャス	Creole
中東	Zandj / Zanji, Habasha, Ahabish, Mawalid, Takruri, Siddee
アラビア	Takruni, Ababish, Askir
マスカット	Hubshees
ドーファー（南オマーン）	Sambo
カタール	'abid
イラン	Habashis
パキスタン（南バルキスタン）	Gadaras, Shidi Shidi, Baluchi Shidi, Sindri Shidi, Makrani
パキスタン（シンド）	Bambasi, Shidhis, Gudros, Kambranis, Zangibari
インド	Bandhis, Chaus, Nandari, Shamal, Sidi (Scidee, Scidy, Seede, Sedee, Seedie, Seydee, Shidis, Siddie, Siddee, Siddy, Siddi, Sidy), Habishi, Habishis, Hupsi, Hubshee, Budavant, Cafres, Caffre, Caffree, Kafra, Kafrai, Kafri, Kaphire, Habshi Kafirs
旧ポルトガル領インド	Kafira Landa
スリランカ	Abisi, Kaffir
ポルトガル領アジア	Mulato, Abeixi, Abeixim, Abeixm
インドネシア（ジャワ）	Belanda Hitam
中国	'K'un-lun

（出所）M. Ember, C.R. Ember, and I. Skoggard ed., *Encyclopedia of Diaspora*, Vol.1, Plenum Publisher, New York, 2004. pp.7-8.

となった16世紀～19世紀における近代世界システムの誕生と、インド洋を含む海洋アジアへのヨーロッパ・ファクターの登場によって生じたシステムシフトについて検討する¹²⁾。これまでアフリカ人の移動とそれに伴う文化現象に関する研究は、ポール・ギルロイの『ブラック・アトランティック—近代性と二重意識—』に見られるように大西洋システムを中心に展開されてきたが、本稿では、インド洋世界に形成された「離散共同社会」に関する近年の比較研究の試みに注目する¹³⁾。次いで、インド洋システムの一部を形成したアフリカ大陸南東岸とその周辺諸島、紅海・アラビア半島、およびインド亜大陸沿岸部をとりあげて、アフリカ人の移動の実態を検討する歴史的な前提としていくつかの重要と思われる先行研究に依拠しながら「インド洋奴隷貿易」を概観する。また、主として大西洋奴隷貿易史研究において検討されてきた「中間航海」（Middle Passage）の概念を援用しながら、インド洋奴隷貿易の具体的な実態を明らかにする¹⁴⁾。最後に、本研究の今後の課題と展望を提示する。

2 インド洋交易システムの変容と連続

本節では、アフリカ人の移動が行われる際に前提となった歴史的枠組みはどのように形成されたのか、という問題を検討する。その場合、インド洋にヨーロッパ・ファクターが参入することで、どのようなシステムシフト—連続と非連続—が生じたのかについて注目しながら考察する。

インド洋海域世界の歴史的研究で著名なチョードリ (K.N. Chaudhuri) は、イスラームの興隆から 18 世紀中葉までのインド洋の変化について『インド洋における交易と文明』(*Trade and Civilisation in the Indian Ocean: An Economic History from the Rise of Islam to 1750.*) のなかで次のように論じた。

インド洋全体は、「統合の構造」を有していた。それは、モンスーン (季節風) の定期的なリズムによって生み出され、イギリス人やオランダ人が出現する前には地域間で見られた経済面での相互依存の関係であった。図 1 は、イスラームの興隆からヨーロッパ人の出現にいたるインド洋およびアジアにおける交易港と都市の盛衰を表したものである。また、図 2 に見られるように、インド洋海域における西から東に至る交易パターンは、モンスーンの季節的変動を考慮すれば、アジア産品の集散地を結ぶ三つの交易圏が部分的に重なる形で展開されていた。ヨーロッパの海洋強国の出現によってもたらされた主要な変化の一つは、インド洋の島嶼国家を超えてこの構造的統合性が広げられたことである。すなわち、遠方にある島嶼諸国の間で経済的相互依存が拡大するとともにインド洋がヨーロッパの交易システムと結び付けられたのである¹⁵⁾。インド洋世界は、海洋交易システムと沿岸地域における大河川システム (ヒンドスタン、ビルマ、ベンガル) とが結合する形で成立したのであるが、本節では、16 世紀から 18 世紀において歴史空間としてのインド洋システムの「内的な均衡」と「外部世界との関係」にどのような変化が見られたのかを検討しておく。

16 世紀におけるポルトガルの進出に先行するインド洋世界では、どのような交易が展開されていたのであろうか。図 1 と図 2 に示されているように、インド洋交易の中心地として知られていたカンベイ (Cambay) を起点とする交易は、一方はアデン (Aden) に、他方はマラッカ (Malacca) に伸びていた。それ以外に、ホルムズ (Hormuzu)、ゴア (Goa)、マラバル (Malabar)、セイロン (Ceylon)、コロマンデル (Coromandel)、ベンガル (Bengal)、ペグ (Pegu)、シャム (Siam) とともに定期的な交易が展開されていた。カンベイに対抗したのは、マラバル沿岸のカリカット

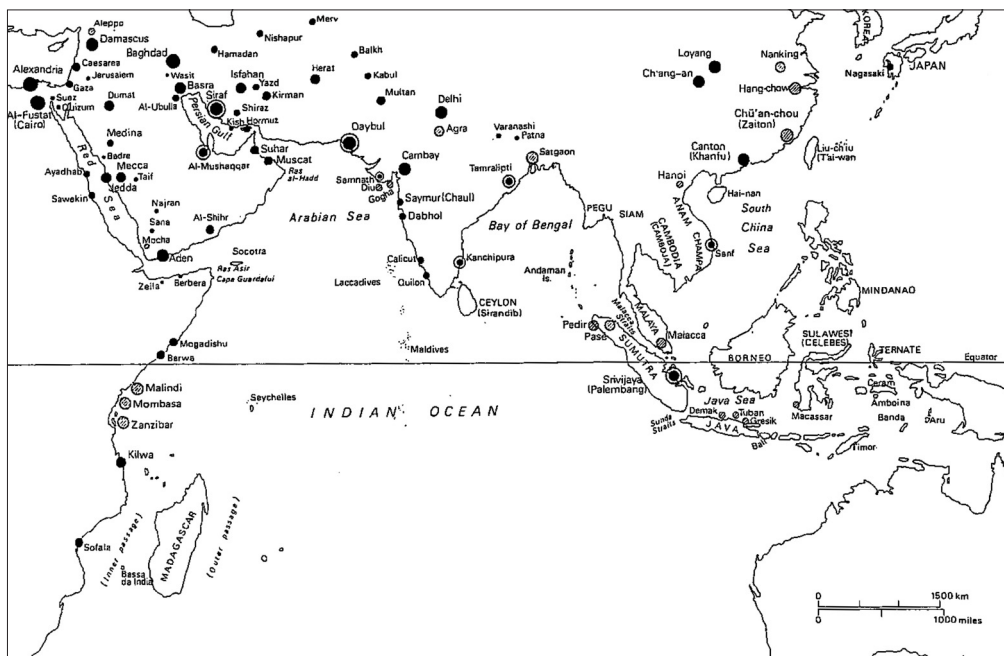


図1 インド洋における交易港と港市、618-1500年

(出所) K.N. Chaudhuri, *Trade and Civilisation in the Indian Ocean: An Economic History from the Rise of Islam to 1750*, Cambridge, Cambridge U.P., 1985, p.38.

(注) ● 1000年前後で重要性に変化のなかった場所、● 1000年以後衰退した都市、◎ 1000年以後台頭した都市

(Calicut)であった。カリカットは、ペルシャ (Persia)、カンバイ、コロマンデル、セイロン、モルジブ (Moldive) の間で交易を展開する拠点であった。図1と図2を見ればわかるように、地理的位置から考えると、マラッカ、アデン、ホルムズは、「インド洋への入り口」にあたる。すなわち、マラッカは、インド洋の商人と東・東南アジアの商人の主要な接触地点であり、インド洋と外部世界のネットワークの結節点であったアデンとホルムズは、スワヒリ海岸と紅海およびアラビア海の沿岸交易の中心であった¹⁶⁾。

16世紀になって、アジアに進出してきたポルトガルの活動は、政府による独占的交易に加えて民間のポルトガル商人によるアジア交易世界への進出に道を開くものであった。東アフリカからの交易品の多くはゴアに向けられた。ポルトガルが進出し支配

5 移行期のインド洋経済圏におけるアフリカ人の移動

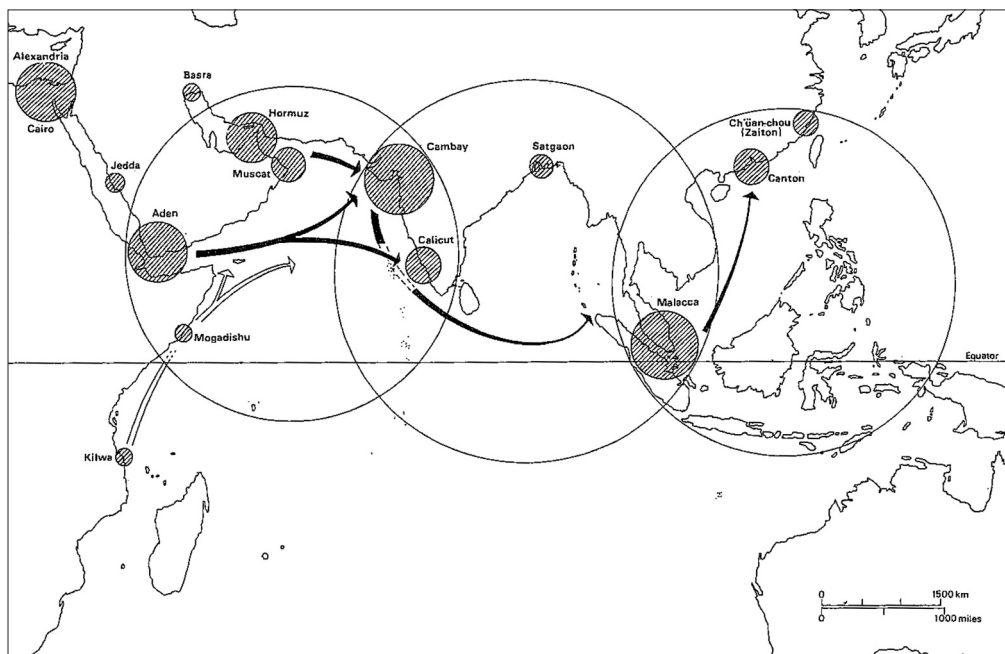


図2 インド洋における交易パターン、1000-1500年

(出所) K.N. Chaudhuri, *Trade and Civilisation in the Indian Ocean: An Economic History from the Rise of Islam to 1750*, Cambridge, Cambridge U.P., 1985, p.104.

(注) 各円は、モンスーンの四半期ごとの移動を示す。各都市は、交易品の集散地を示す。

したゴアは、その保護と強制力の下でインド洋世界の交易センターとして、また、西インド沿岸海運の中心として栄えた。グジャラート、マラバル、セイロン、コロマンデルから多数の交易船がゴアに集結した。図3は、16世紀末のインド洋におけるポルトガルの拠点とその交易ネットワークおよび海軍力による「インディア領」(Estado da India)の版図を示したものである。しかし、1600年ごろのインド洋交易ネットワークの中心は、依然としてグジャラートであった。交易の中心都市はカンベイからスラトへ移動するが、この地方から紅海と東南アジアへ向かう交易は健在であった。17世紀をふりかえると、ポルトガルが交易の拠点としたゴアは弱体化し、グジャラートの交易はスラトへ集中している¹⁷⁾。

16世紀の最後の10年間にインド洋世界にはオランダ船とイギリス船が出現し始め、

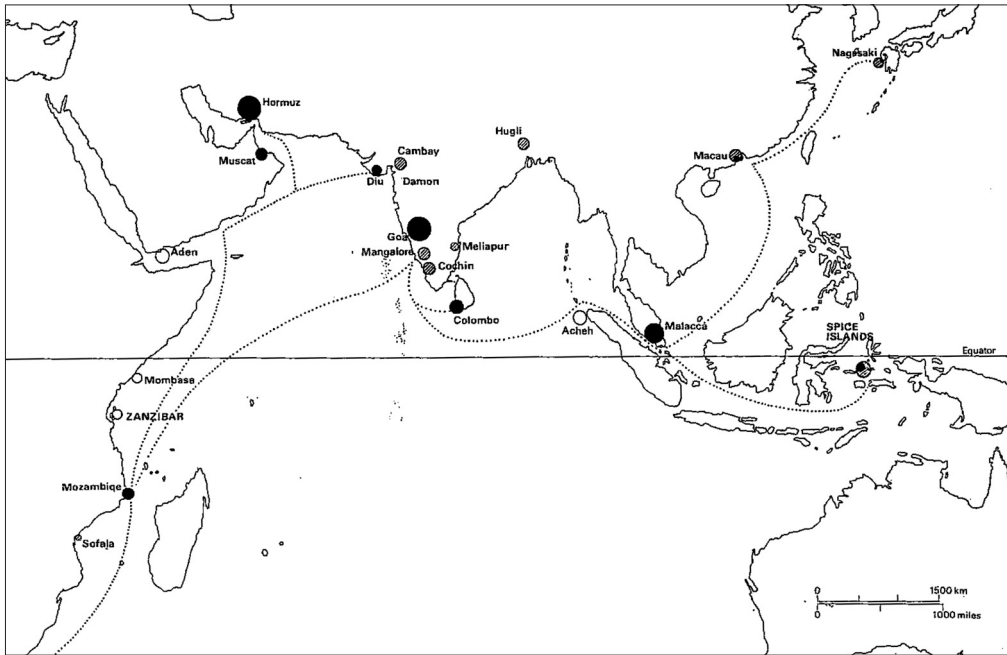


図3 インド洋におけるポルトガル帝国、1580年

(出所) K.N. Chaudhuri, *Trade and Civilisation in the Indian Ocean: An Economic History from the Rise of Islam to 1750*, Cambridge, Cambridge U.P., 1985, p.70.

- (注) ● 主要なポルトガル人定住地 (砦)
- ◐ ポルトガル人口の多い都市
- ポルトガル海軍による定期的巡回が行われる都市

ポルトガルは、自らの海上覇権と経済的繁栄に対して脅威を感じ始めた。17世紀前半には、オランダがバルト海、北海および北大西洋の交易を支配し、同国の海運業と金融業が産業の成長を支えた。オランダ商人は、ヨーロッパと大西洋の隅々にまで進出し、アムステルダムはヨーロッパ経済の中心となる。17世紀においてヨーロッパの交易ネットワークとインド洋の交易ネットワークを結ぶ重要な役割を演じたのもオランダであった。オランダはインド洋交易の拠点としてバタビアを建設している¹⁸⁾。

オランダとイギリスがアジア貿易に進出するにあたって設立されたのがオランダ東インド会社 (Dutch East India Company, *Vereenigde Oost Indische Compagnie*, VOCと略記) とイギリス東インド会社であった。図4は、17世紀～18世紀のインド洋におけるイギリス東インド会社とヨーロッパ諸国の入植地を示したものである。VOC

5 移行期のインド洋経済圏におけるアフリカ人の移動

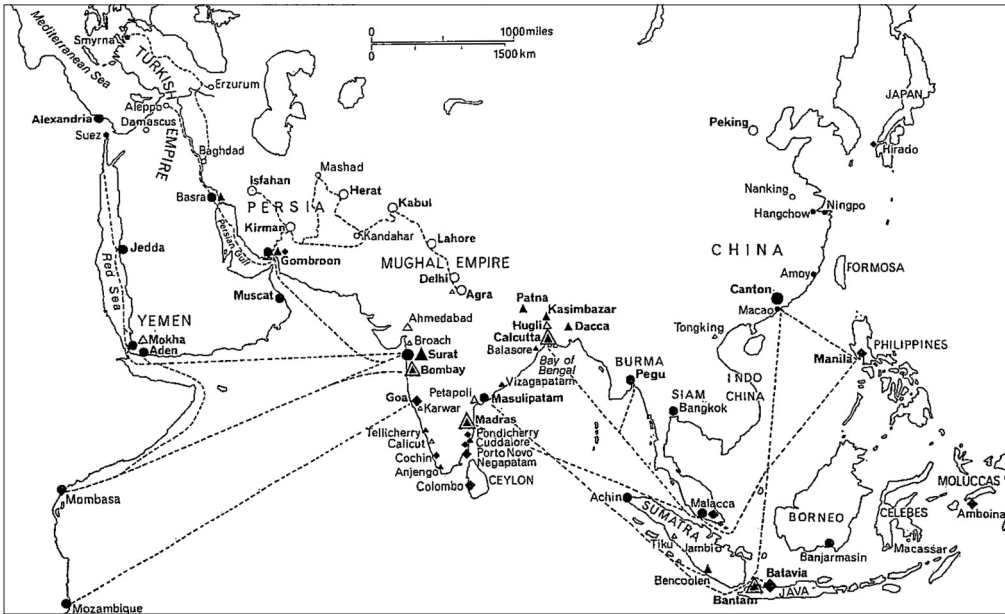


図4 17-18世紀のインド洋：イギリス東インド会社およびヨーロッパ諸国の入植地
 (出所) K.N. Chaudhuri, *Trade and Civilisation in the Indian Ocean: An Economic History from the Rise of Islam to 1750*, Cambridge, Cambridge U.P., 1985, p.96.

(注) ----- 交易路、● 港湾都市、▲ Presidency 所在地、▲ 商館所在地、
 △ 撤去された商館、◆ 他のヨーロッパ諸国の定住地

がインド洋システムにもたらしたものは、バタビアを中心にした強力な持続的な多角的交易ネットワークであった。1630年代には、VOCは、モカ (Mocha)、バンドル・アバス (Bandar Abbas)、イスファハン (Isfahan)、スラト、アーメダバード (Ahmedabad)、アグラ (Agra)、ウエングラ (Wengurla)、マスリパトナム (Masulipatnam)、プリカット (Pulicat)、ベンガル (Bengal)、アラカン (Aracan)、ペグ (Pegu)、西スマトラ (West Sumatra) を結んで交易を展開していた。17世紀中頃には、セイロンとマラバル海岸の基地が VOC の活動拠点に加えられた。これらは、日本からオランダへ伸びる広範な交易ネットワークの一部を形成したのである¹⁹⁾。

それでは、以上のようなヨーロッパ・ファクターの登場は、インド洋の交易に何をもたらしたのであろうか。これについては、いくつかの議論を提示することができる。

ポルトガルの建設したゴアや後にオランダの建設したバタビアは、ともにインド洋における交易関係を緊密化しようとして建設されたというよりもむしろインド洋と外部世界との結びつきを強化しようという関心に基づいて、交易の中心とすべく建設された。18世紀前半においても、旧来から重要な交易拠点であったスラトと新興のバタビアはインド洋交易の中心として互いに競合していた。たとえば、交易の中心としてのスラトの持続性はインド洋交易にかかわったアジア人企業家の強靱性と柔軟性を象徴していたと見ることができる。インド洋交易へのオランダ東インド会社の参入は、「アジア間交易」(Intra-Asian Trade)を衰退させたり、インド洋交易を抑圧(suppress)したり方向転換(redirect)させたのではなく、インド洋ネットワークの一部を脱臼(dislocate)させたにすぎなかったと見ることもできるかもしれない²⁰⁾。

とはいえ、同時にインド洋交易ネットワーク自体の脆弱性も表れてきた。というのは、この地方の生産者と商人は長期にわたってヨーロッパ人顧客の需要の増加に応えることで海外交易を拡大できたのであるが、ヨーロッパにおけるアジア製品の著しい需要増に対する対応の不十分さ、イスラーム帝国の政治的混乱などのために生じた海上ルートの不安定化を緩和するアジア人商人独自の防衛手段の欠如のために、インド洋交易の中心スラトが衰退する道を用意してしまったからである。16世紀～18世紀には、インド洋交易システムは、「内的な均衡」と「外部世界との関係」の変動を経験したのである²¹⁾。

3 インド洋におけるアフリカ人の移動 — 奴隷貿易を中心に —

3.1 北アフリカ・中東・アジアへの奴隷貿易の概観

大西洋奴隷貿易と異なり、サハラ以南アフリカから地中海南岸の北アフリカ、中東およびアジアに向けた奴隷の輸送には、長い歴史がある。紀元前2900年にナイル川の第2瀑布でエジプトの奴隷となったヌビア人を乗せたボートを描いた石板が残されている。以後5000年間にわたりアフリカ人奴隷は、戦闘と略奪の中で捕らえられて市場で売買され、ナイル川を下りサハラ砂漠を越えて地中海へ運ばれたり、紅海を越えてアラビアへ、インド洋を渡り南・東南アジアに運ばれたりしたのである。エジプトの各王朝は、紅海沿岸や「アフリカの角」と呼ばれる地域から奴隷を獲得した。北アフリカの地中海沿岸に築かれたフェニキア人の居住地には、その後背地出身の奴隷あるいはサハラ以南アフリカ出身の奴隷もいたと言われる。ギリシャ人やローマ人も古代エジプト人を継承して、ヌビアの奴隷を略奪し、地中海沿岸の諸都市から軍隊を派遣

5 移行期のインド洋経済圏におけるアフリカ人の移動

してフェザンやサハラの子隷をつれて帰国した。地中海やアジアの諸帝国において、このようなアフリカ人子隷は家庭で家事労働の担い手として使用されたり、農場や鉱山の労働力および軍隊の子隷兵士として使用されたのである。

7世紀におけるイスラームの台頭にもなつてアフリカにアラブ人が登場する以前には、地中海、中東およびインド洋に運ばれたアフリカ人子隷について信頼しうる数値は残されていない。過去4000年間、アフリカ社会において子隷が一般的に容認された制度であった時代には子隷がサハラ砂漠を越えて移動し、紅海やインド洋をわたり、アジアに輸送されてきたと推測することは誤りではないであろう。アラブ台頭後の800年から1600年までの800年間に限定した場合、貿易、人口および軍隊へのアフリカ人子隷の需要などの間接的データに基づいてポール・ラブジョイの推計したところによると、表2に見られるように、1年ごとの人数はわずかであったにせよ、地中海地方やアジアに運ばれてきた数は、相当なものになっていた²²⁾。

ヨーロッパ諸国が国際貿易に進出してきた17世紀には、子隷数の推計は次第に信頼できるものになる。1450年から1900年まで、大西洋子隷貿易では1131万人のアフリカ人子隷が南北アメリカに運ばれたと計算されている。他方、北アフリカ、中東およびアジアにおいては800年と1900年の間に総数で1258万人の子隷が運ばれたと計算されている(表2参照)。大西洋子隷貿易では1100万人以上の子隷がわずか400年間に南北アメリカに運ばれたということは、この子隷貿易に巻き込まれた主として西アフリカの社会は集中的に重大な影響をうけたと予想される。これに対して、11世紀間にわたつてアジア各地に1250万人の子隷を輸出した北東および東アフリカの社会が大西洋子隷貿易のために西アフリカ沿岸で経験されたものとまったく同じような衝撃をうけたのかどうかは、にわかには判断できないところがある。比較的信頼度の高い資料の得られる1600年と1900年の間には、北アフリカ、中東およびアジアへの子隷貿易は551万人であったと計算されている(表2参照)。この数値は、大西洋子隷貿易の

表2 北アフリカ・中東・アジア向け子隷輸出、800-1900年(単位 1000人)

年	サハラ砂漠経由 北アフリカ	紅海地方	東アフリカから インド洋	小計
800-1600	4670	1600	800	7070
1601-1800	1400	300	500	2200
1801-1900	1200	492	1618	3310
小計	7270	2392	2918	12580

(出所) P. Lovejoy, *Transformations in Slavery*, Cambridge U.P., 2000. 所収の各表より作成。

約半分にあたる。19世紀初頭のナポレオン戦争終了期には、プランテーション経済が東アフリカの沿岸部、インド洋のザンジバル島、ペンバ島およびマスカリーン諸島（モーリシャス、レユニオンを含む）で発展し、労働力としてアフリカ大陸から多くの奴隷が運ばれた。表3に見られるように、1860年以後奴隷貿易廃止論が広まり、大西洋およびインド洋への奴隷貿易が抑制されたにもかかわらず、その終了にいたるまでの50年間に東アフリカのインド洋奴隷貿易は、それに先立つ時代のいずれと比較しても顕著であった²³⁾。

ところで、15世紀末にサハラ以南アフリカ東部のインド洋沿岸にポルトガル人が出現する以前、イスラームは、アフリカにおける奴隷制に一定の変化をもたらす宗教的イデオロギーとなった。アラブ人は北アフリカ、中東、バルシャを征服し、それぞれの土地で歴史のある奴隷制を自らの社会に吸収してイスラームの宗教的法律や慣行に一致するように再編成した。アラブ人の奴隷に関する法的な定義と取扱は、非自発的な労働慣行の根本的な変更というよりもむしろ奴隷の地位と役割の修正であった²⁴⁾。イスラームにとって他者を奴隷とする唯一の判定基準は、彼らが異教徒であるか否かであった。アフリカ人の伝統的な宗教はイスラームには容認されなかったために、イスラーム商人にとってサハラ砂漠以南のアフリカはもっとも重要な奴隷供給源となった。イスラーム商人たちが創り上げたサハラ砂漠を越えた地中海南岸、紅海およびインド洋を結ぶ商業ネットワークは、奴隷貿易のルートとなった。イスラーム世界では、イスラーム教徒の指導者は非イスラームの奴隷を改宗させ、イスラーム社会のメンバーに加えていく責務を負っていた。キリスト教とは異なり、イスラーム法の下では、奴隷が改宗と同化によってイスラーム社会に受け入れられるにはそれほど長い時間はかからなかった。アラブ人の征服は多種多様な民族を含む広い範囲の帝国を生み出したのであるが、それを統治するには、イスラームの宗教倫理に基づいた国家ないし巨大な官僚機構の形成が不可欠であった。したがって、重く用いられた奴隷出身の官吏は、しばしば、国家の運営に対して権威を振るうことがあったり、イスラーム世界においてもっとも進んだ技術を獲得した奴隷が高度に専門化した商工業に従事することもしばしば見られた。イスラーム社会では、奴隷の女性は、大西洋の奴隷制社会とは異なり、他の奴隷、解放された奴隷、奴隷主の息子たちとの関係でいえば、内縁の妻であった。彼女たちは、自らの所有者の死によって法的には自由になる。もし彼女が子どもをもうけた場合、その子は売買の対象とはならず、自由の身になる。しかし、彼らが自由な妻の子どもよりも低い地位におかれたことは確かである²⁵⁾。

3.2 北アフリカおよび紅海への奴隷貿易

15世紀に至るまでサハラ砂漠を越えて北アフリカへ、紅海をへて中東へ、インド洋をへてアジアへ輸出された奴隷の人数は、1年当たり5000人と10000人の間であった。800年と1600年の間にサハラ砂漠を越えて輸送された奴隷の総数は467万人いたといわれる。これにはWalata Road、Taghaza Trail、Ghadamas Road、Bilma Trail、Forty Days Roadの6つのサハラ縦断交易ルートが利用された。また、このような縦の交易ルートの主要な交易拠点を東西（横）につなぐ交易ルートも利用されている。これらの交易ルートで運ばれたのは、主として金と塩などであり、その交易品の中に奴隷が加えられていたと見るほうが史実に近いと思われる。17世紀と18世紀は、総数で140万人、1年あたりで7000人の奴隷が運ばれた。これらは、サヘルやサバンナで発生した旱魃や戦闘のために生まれた奴隷であった。19世紀になるとサハラ砂漠越えの奴隷貿易は減少し、ナイル川地域の奴隷貿易が増加した。ヌビア砂漠を越えてナイル川を下り、毎年10000人～12000人の奴隷がエジプトに運ばれた²⁶⁾。

紅海の奴隷貿易はサハラ砂漠越えの奴隷貿易よりも古く、エジプトの各王朝の支配者は、定期的にプント地方、紅海沿岸、北ソマリアに遠征隊を派遣し、象牙、香料および奴隷を獲得してきた。エジプトがギリシャとローマの支配下におかれたときにも、紅海やアラビア海をわたってアフリカからアラビアへ輸出された商品のなかに奴隷がいたことは疑いない。800年と1600年の間の時期について奴隷数が記載されている資料はきわめて稀少であるが、この時期には平均して1年あたり2000人、全期間で160万人の奴隷が輸出されたようである。紅海貿易における奴隷の供給源はヌビアで、現在のスーダンの首都カルツームの位置するナイル川合流点の北およびエチオピアであった（表2参照）。奴隷の積出港としては、1416年にオスマントルコに破壊されるまでのエジプトのアイダブ（Aidhab）、スーダンのスアキン（Suakin）、エチオピアのアドゥリス（Adulis、後のマサワ Massawa）などをあげることができる²⁷⁾。

17世紀には、紅海への奴隷輸出は、毎年1000人程度で安定していた。18世紀になるとエチオピアとナイル渓谷からの奴隷貿易は、毎年約2000人に増加している。しかし、19世紀に顕著になったアフリカ人奴隷の世界規模での輸出と比べてみれば、わずかなものであった。18世紀と19世紀初期を通して、ナイル川盆地のダルフル（Darfur）から、一年あたり数千人の奴隷がエジプトに送られただけでなく、ブルーナイルのセナール（Sennar）を経由して、また東のスアキンへ通じる既によく知られた交易路にそって紅海に奴隷は送られた。セナールのフンジ王国（Funj Kingdom）は、1821年

にムハンマド・アリの軍隊に征服されるまで毎年約1500人の奴隷を輸出した。それ以後の一世紀間には、冒険商人によってエジプトに向けてナイル川交易が組織されただけでなく、多数のスーダン人奴隷はエジプト政府が管理していた紅海の諸港を経由してアラビアに運ばれたのである²⁸⁾(表4参照)。

この同じ数世紀間にはエチオピア高地も奴隷の供給源となった。エチオピアの奴隷は、後にマサワとなる古い港アドゥリスからイエメンやアラビアに定期的に送られた。この地方で肥沃な高地に住むキリスト教徒のエチオピア人と乾燥の低地に暮らすイスラーム教徒のソマリ人の間で数世紀にわたって絶えず対立が続いていた。16世紀になって、ハラル(Harar)の著名な導師(イマーム)、イブラヒム・アルガジ(Ibrahim al-Ghazi)とソマリの兵士がエチオピアに侵入し、教会や修道院を破壊しておびたしい数のキリスト教徒のエチオピア人を奴隷にした。イブラヒムは、1543年、マスケット銃を携えたポルトガル人兵士に殺されるまで、攻撃を続けた。それ以後、エチオピアの集権的支配が崩壊していた17世紀と18世紀の間も、マサワを介して奴隷は供給され続けた。エチオピアは、200年間にわたる無秩序状態の中で崩壊していき、その間競合する貴族の小競りあいや侵略のために多くの奴隷が生み出され、イスラーム

表3 北アフリカ・中東・アジア向け奴隷輸出、1600-1900年(単位 1000人)

年	サハラ砂漠経由 北アフリカ	紅海地方	東アフリカから インド洋	小計
1600-1700	700 (12.7)	100 (1.8)	100 (1.8)	900
1701-1800	700 (12.7)	200 (3.6)	400 (7.3)	1300
1801-1900	1200 (21.7)	492 (8.9)	1618 (29.4)	3310
小計	2600 (47.2)	792 (14.4)	2118 (38.4)	5510 (a)

(注) カッコ内は、(a)に占める割合を%で表記。

(出所) P. Lovejoy, *Transformations in Slavery*, Cambridge U.P., 2000. 所収の各表より作成。

表4 東アフリカの地域別奴隷輸出、1800-1900年
(単位1000人、カッコ内%)

輸出地域	人数
アラビア、バルシャ、インド	347 (21.4)
南東アフリカ	407 (25.1)
マスカリーン諸島	95 (5.9)
東アフリカ沿岸	769 (47.5)
合計	1618 (100)

(出所) P. Lovejoy, *Transformations in Slavery*, Cambridge U.P., 2000. 所収の各表より作成。

5 移行期のインド洋経済圏におけるアフリカ人の移動

商人に売り払われたのである。19世紀になって、エチオピア内部の安定は回復したが、エジプト政府に反抗する辺境での戦闘は続いていた。一方、イスラーム教徒のガラ人（Galla、オモロ人 Omoro）は、奴隷を求めて南西エチオピアを攻撃し、奴隷は、ペラベラやゼイラのソマリ人支配下の港からアラビア海を越えて運ばれていった。奴隷市場では、子どもや若い女性は3倍の高値がつき、数の上でも2対1で成人男性を上回った。19世紀前半に紅海の奴隷貿易はピークを迎え、毎年6000～7000人の奴隷が運ばれた。19世紀の第2四半期には約175000人の奴隷が輸出されている²⁹⁾（表3、表4参照）。

3.3 東アフリカとインド洋奴隷貿易

紀元後数世紀の間、ギリシャの貿易商は、東アフリカ沿岸を南下し、奴隷を含む交易品の取引で利益をあげたと言われるが、インド洋におけるギリシャの商船隊のプレゼンスは、ローマ支配の前に短命に終わった。しかし、東アフリカの沿岸交易は、古くからアラビア、ペルシャ、インドおよび中国の商人たちによって続けられていた。東アフリカ以北のインド洋西海域は、南アラビア・紅海沿岸、オマーン・ペルシャ湾海域、インド亜大陸西岸に分けることができる。このなかでオマーン・ペルシャ湾海域のアラビア半島側では、家内奴隷や妾、軍隊などに奴隷の需要があり、漁労や航海活動にも奴隷が使用されていた。また、湾岸の重要な産業——ナツメヤシのプランテーション栽培や真珠採取など——の労働力としても奴隷労働への需要は大きかった³⁰⁾。

アラブの商人は、モンスーンによってインド洋の水路を往復していた。彼らは、アジア産の商品——織物、磁器、ガラス器、陶器——を東アフリカにもたらし、帰路には、アジアに持ち帰る象牙、金、サイの角およびスパイスに加えて「ザンジ」（黒人）といわれる奴隷を常にともなっていた。この奴隷たちは、農場、鉱山、軍隊および家庭で使用された。アラブ人に続いたのはペルシャ人と中国人であった。この時代に、交易船がもっぱら単一の商品——たとえば奴隷——の輸送だけで目的地と母港の間を往復していたとは考えにくい。風向きに合わせて寄港地を転々としながら複数の商品を仕入れたり売却しつつ出発地と目的地を往復するダウ船を利用した交易が一般的であったと考えるほうが自然である。宋や明の時代に、中国人は、東アフリカの沿岸で盛んに交易を行い、象牙、サイの角、亀の甲羅を入手して、東方で高値で売りさばいた。女性奴隷——ほとんど妾——も連れて行かれたようである³¹⁾。東アフリカとその関連地域との交易についてはアラビア語、ペルシャ語、中国語の文献資料があり、また、アラブ人の地理学者や旅行者の著作もあるが、19世紀に入るまでは、輸出された奴隷数に

関する直接の資料は著しく少ないために詳細を明らかにするには今後の研究の進展を待つほかない³²⁾。

インド洋世界の奴隷貿易は、4000年前には始まっていたと言われており、それには陸上と海上の多様なルートがあり、時代によって変化したようである。インド洋世界を東インド洋世界と西インド洋世界にわけた場合、それぞれについてどのように奴隷貿易が展開されていたかを以下に概観しておく。

東インド洋世界では、アフリカ人の奴隷は中東と東南アジアを經由して輸送された贅沢品であった。2世紀ごろの中国では、熟練したアフリカ人水夫やアレキサンドリアのジャグラーが奴隷として求められたようである。4世紀には、中国に黒人奴隷(K'un-lun)の定期市が開かれたという記録もある。9世紀に入ると東アフリカ出身の奴隷は、ダイバーとして重んじられ、船の浸水を防ぐコーキングの仕事に用いられた。12世紀～15世紀には、アフリカ人奴隷は中国船隊の水夫として利用されている。1400年代にはマダガスカルや東アフリカの奴隷がインドネシアのアチェを経て中国に輸入され、モンゴル時代のエリート家庭の召使として使用された。1500年以降、アフリカ人の奴隷はマカオや日本のポルトガル人居留地やインド洋世界各地の砦で保有されていた。1694年には、25000人の奴隷がバタビアにいたと言われる。東アジアではアフリカ人の奴隷は少なかったが、中国では軍事目的で使用されていたようである³³⁾。

それでは、西インド洋世界におけるアフリカ人奴隷はどのような動きを示したのであろうか。まず、南アジアについてみると、3世紀にアラブの商人が最初のアフリカ人奴隷をインドへ運んだようである。奴隷は、インド亜大陸西岸のコンカン(Konkan)にあったソパラ(Sopara)、カルヤン(Kalyan)、コール(Chaul)、パル(Pal)に運ばれた。イスラーム商業の拡大にともなってアフリカ人奴隷の需要が増大した10世紀以降、ベルベル、エチオピア、サハラ以南アフリカの奴隷が南アジアに運ばれた。現在のパキスタンにあたるシンド(Sind)の多数の奴隷は、東アフリカ出身のシディ(Sidi)であった。ベンガルや南インドではアフリカ人の奴隷が多かったようであるが、トルコやスラブの中に中世期の南アジアに輸入された奴隷も含まれていた。ゴア(Goa)、ダマン(Daman)、デュイ(Dui)、スリランカ(Sri Lanka)のポルトガル人居留地ではアフリカ人の奴隷に対する需要が増加した。とくにモザンビーク海岸の奴隷がつれてこられたようであった。ポルトガル人とインド人の商人はこの奴隷貿易をシェアしていたが、次第にインド人の手に集中するようになった。スリランカのオランダ人やイギリス人の基地にはマダガスカルや東アフリカの奴隷がケープタウン、ボンベイ、ゴアを經由して輸入された。他方、ゼビッド、アデン、ペルシャ湾を經由

5 移行期のインド洋経済圏におけるアフリカ人の移動

するアフリカ人奴隷の輸入も増加していた。研究書にはアフリカ人奴隷の輸入に関する言及は多いが、南アジアの奴隷には現地出身者が多く、インド人奴隷がマカオ、日本、インドネシア、モーリシャス、ケープタウンにも運ばれていた事実を見逃してはならない³⁴⁾。

アフリカ人奴隷は東インド洋世界よりも西インド洋世界に多く運ばれた。中東はアフリカ人奴隷が最も早くから現れ、最も大きな市場であった。エジプトのファラオの時代以来ヌビアから奴隷が輸入されていた。紀元後にはエチオピア、スーダン、ソマリアから奴隷が輸入された。7世紀に入ってアクスムの商業が拡大すると、南部の辺境から奴隷の輸出が増加した。奴隷は、ナイル川を經由してエジプトへ、またイエメンの奴隷市場にあたるゼイラやゼビッドを經由してアラビアやペルシャ湾へ運ばれた。アラブ人やペルシャ人の商人は、ソマリアから直接に奴隷を獲得することもあった。7世紀にはイスラームの台頭があり、イスラーム社会では同じ宗教を信じている人間を奴隷とするのは非合法とされたので、奴隷の輸入が増加した。8世紀には中東はアフリカ人奴隷の重要な市場となった。9世紀末のイラクにおけるザンジ（東アフリカ人）による大反乱の発生は東アフリカ出身の奴隷が多かったことを示している。蜂起には多くの自由人も含まれていたが、反乱奴隷の多く北東アフリカ出身者であった³⁵⁾。

10～13世紀においてもイスラーム商業の拡大によってアフリカ人奴隷の輸入が増加した。多くの商人はアフリカ人イスラームをメッカやメディナへの巡礼に伴っていたし、イスラーム商業の前線の拡大に伴って南はソファラに至る東アフリカからの奴隷輸出が始まった。この時代には、中東ではグルジアや中央アジアの奴隷よりもアフリカ出身の奴隷のほうが多くなった。アフリカ人の奴隷輸出は14世紀にはいったん減少するが、再び15世紀末以降増加した。多くはエチオピアやナイル川を運ばれたが、東アフリカ沿岸やマダガスカルから積み出された奴隷もいた。カイロ、アフリカ側の紅海沿岸港のゼイラ、ベルベル、アラビアのゼビッド、アデンの市場は、奴隷の再輸出地としての役割を担った。1500年～1800年におけるイスラーム世界へのアフリカ人奴隷の輸入は、一年当たり平均で8000人または10000人と12000人の間であり、その半分はカイロを經由した。19世紀になると、東アフリカ沿岸からの奴隷輸出が急激に増加し、オーステン（R. Austen）の計算によると80万人が中東へ、30万人が紅海とアデン湾をわたり、残りはスワヒリ海岸から運ばれた。20世紀初頭においても、中東は奴隷をイランのマ克蘭海岸、西インド、インドネシアおよび中国から輸入していた³⁶⁾。

ところで、アフリカは、通常、外部市場への奴隷の供給源と言われてきたが、非アフリカ人奴隷の市場でもあった。1658年～1807年、ケープにはベンガル、コロマンデル、マラバル、マカッサル、バリ、チモール、ラルナト、マカオ、マダガスカル、マスカリーンから奴隷が輸入されている。また、奴隷化されたアフリカ人の多くはアフリカ大陸内にとどめられた。たとえば、18世紀半ば以降、東アフリカ人の多くはザンジバル、ベンバ、ソマリア、マダガスカル、マスカリーン、ケープタウンに運ばれた。マダガスカルの奴隷の多くは、レユニオンやモーリシャスに送られ、スワヒリ海岸やケープにも送られている。1832年にザンジバルにはオマーンの支配者が移住したが、これは東アフリカがペルシャ湾に対して、またスワヒリ海岸のプランテーションの奴隷制に対して経済的重要性が高まったことを反映していた。アフリカに近いインド洋諸島—コモロ、マダガスカル、マスカリーン—では、19世紀には活発な奴隷需要が生まれ、そのうち70万人は東アフリカ出身で、具体的にはモザンビーク高地とタンザニアの出身であった³⁷⁾。

18世紀末のインド洋海域において、アフリカ大陸本土からキルワを經由して砂糖やコーヒーのプランテーションが営まれていたフランス領のマスカリーン諸島へ運ばれた奴隷は、1年あたり2500人であったという記録が残されている。また、モザンビークからケープタウンやブラジルに運ばれた奴隷に加えて、東アフリカ沿岸の港から南東アフリカや南アメリカに向けて運ばれた奴隷が一年に4000～5000人いたと言われる。奴隷数は、18世紀の最後の30年間に急増したようであるが、これは19世紀前半において奴隷貿易と奴隷制が廃止されていたにもかかわらず、奴隷貿易が増加する前兆であった³⁸⁾。

19世紀の最初の10年間には、80000人の奴隷が東アフリカの内陸部から運び出されたと推計されている。その約3分の1は東アフリカ沿岸部で使用され、残りの50000人はアラビア、ペルシャ、インド、マスカリーン諸島および南北アメリカに船で運ばれた。それに続く40年間にはマスカリーン諸島への奴隷輸送は衰退し、それにかわって南北アメリカに運ばれる奴隷の数が次第に増加していった。ブラジルに運ばれた奴隷は、1830年代と40年代には10年あたりで10万人となってピークを迎えたが、その後、19世紀中頃以降には急激に減少する。この同じ半世紀間に、東アフリカ沿岸からインド洋各地にむけられた奴隷は少しずつ増加し、1850年代と60年代には10年あたり65000人にまで増加した。この傾向は、ザンジバルのスルタンの下でイギリス政府とその海軍の取締りによって海上の奴隷貿易がすべて強制的に禁止される1873年まで続いた。奴隷貿易にかかわった仲介人は、奴隷を扮装させたり、船員や船員の妻な

5 移行期のインド洋経済圏におけるアフリカ人の移動

どにみせかけたり、ダウ船の速度の調整など航海技術と知識を駆使して巧みに監視を潜り抜け、そのためには最新の情報を入手して奴隷貿易の取締まりに対抗していたようである³⁹⁾。イギリスの介入にもかかわらず、東アフリカ沿岸部のプランテーションで働く奴隷は、19世紀の最初の10年の35000人から1870年代には188000人にまで増加し、10年あたりで20%の増加率を示した。また、1890年と96年の間でさえも16000人の奴隷が海岸部に到着し、インド洋を越えて密輸されている⁴⁰⁾。

19世紀の東アフリカにおける奴隷貿易の顕著な増加は、プランテーションの発展によって引き起こされた。ザンジバルやペンバのプランテーションには、大量の不熟練労働が必要とされていたからである。現在のイエメンの南にあたるハド라마ウト(Hadhramaut)とオマーンを出身地とするアラブ人移民やアフリカ大陸のインド洋岸のスワヒリ人の実業家は、クローブ、ココナツ、穀物のプランテーションを島に移植した。スワヒリ人がアフリカ大陸本土からインド洋諸島へ奴隷を運び始めるようになったのは、すでに16世紀末のことであった。富裕なスワヒリ人一族、たとえばパテのナバニー族(the Nabhany of Pate)やモンバサのマズルイー族(Mazrui from Mombasa)は、この時代にペンバやザンジバルで所領を獲得した。とくに、ペンバの豊かな土壌と時にかなった降雨量は、豊かな米と穀物の生産をもたらし、同島は16世紀から18世紀にかけてスワヒリ海岸全体の穀倉となった。オマーンからザンジバルに移住したセイド・サイド(Sayyid Said)の指揮下で、クローブの生産と輸出が始まり、その後、ザンジバル島は、国際市場へのクローブの主要な供給地となった。クローブは、綿花と同様に労働集約的な作物である。その収穫には、労働力として奴隷の供給が必要であった。したがって、奴隷の需要が1860年代と1870年代のクローブ生産のピーク時で最大になったのは単なる偶然ではない⁴¹⁾。

17世紀と18世紀において、東アフリカ沿岸とアジア各地で求められた奴隷は、ポルトガルの支配したザンベジ渓谷の後背地から主としてもたらされた。19世紀になると、その供給源は北方へ移動し、ニャムウエジ(Nyamwezi)やヤオ(Yao)などアフリカ人商人たちがタンガニーカ湖やニヤサ湖の位置する内陸部から海岸部に奴隷を運んできた。ポルトガル人のインド洋への侵入によって商業面では後進地に貶められたキルワは、ザンジバルのクローブ・プランテーションの求める奴隷の集散地となり、1866年には必要とされた奴隷労働の約75%を供給していた。1873年にインド洋をわたる奴隷の輸出が禁止されると、キルワは、アフリカ大陸でのプランテーションに奴隷を供給した⁴²⁾。

19世紀初期の2～30年間、東アフリカ沿岸部のアラブ人とスワヒリ人の商人は、奴

隸と象牙を獲得するために、歴史的に古くから利用されている交易ルートを使って内陸部に入り、タンガニーカ湖やビクトリア湖などの湖が点在する大湖地方の周辺に暮らすアフリカ人と取引するようになった。こうしたスワヒリ人商人の活動は、ニヤムウエジやヤオの商人との競争を招き、大湖地方のアフリカ人とも敵対するものとなった。東アフリカの内陸部では、競合する指導者の率いる小集団や商人の間で、またルガルガ（ruga-ruga）と称する戦鬪的集団（バンド）の出現によって略奪と小競り合いが頻発し、そのために被害をうけたアフリカ人の犠牲者は、奴隸となった。この「ルガルガ」は、1830年代に南部アフリカで「ムフェカネ」（Mfecane）として広く知られている社会変動の生じた時に、ズルーの激しい攻撃を逃れて北へ流れてきた人々の一団であった。この時代には東アフリカ内陸部が著しく不安定となり、その結果生み出された奴隸が大湖地方の南では比較的簡単に手に入れられたのである⁴³⁾。

4 インド洋奴隸貿易の「中間航海」（Middle Passage）

「中間航海」（Middle Passage）という用語は、古くから論じられてきた海洋史の概念であるが、これは主として大西洋奴隸貿易の時代にまでさかのぼることができる。すなわち、「中間航海」とは、ヨーロッパからアフリカへの「外向航海」（Outward Passage）と南北アメリカからヨーロッパに戻る「帰途航海」（Homeward Passage）が二辺をなす三角形の底辺を形成するものであった。近年、「歴史が生まれるのは海洋である」（History happened on the Ocean）という認識が深まりつつある。「中間航海」は、奴隸貿易の中でもっとも大きなトラウマをもたらす時であり、『ブラック・アトランティック』のアフリカ人にとって重要な「アイコン」として考えられてきた⁴⁴⁾。しかし、本研究で論じてきたように、この「中間航海」の重要性はひとり大西洋奴隸貿易にのみかかわるのではなく、インド洋奴隸貿易においても等しく重要な研究課題であると考えられる。したがって、インド洋における「中間航海」はどのようなものであったのか、「海洋航海」（Ocean Passage）だけでなくアフリカの内陸部で奴隸とされた人々の「陸上移動」はどのようなものであったのか、を検討する必要がある。本節では、主要な研究資料に依拠して19世紀の北東および東アフリカのアフリカ人奴隸の移動に注目しつつ、いくつかの事例を検討しておきたい。

個々のアフリカ人が奴隸貿易にまきこまれた道は実に多様であった。その契機として戦鬪、大規模な奴隸狩、拉致、債務、盗み、策略などがあげられる。これらは、アフリカ人がアフリカ大陸の内陸部から沿岸部に運ばれるプロセスの多様性を説明して

5 移行期のインド洋経済圏におけるアフリカ人の移動

いる。アフリカ人は、捕らえられてから海岸まで捕らえた人物の手で直接運ばれる場合もあった。また、捕らえられたアフリカ人奴隷は何人かの所有者を経て移動を繰り返すこともあった。海岸への移動が比較的短い時間（2～3週間）で行われることもあれば、その移動が数年にわたり、奴隷としての多様な生活を経験したものもいた。

イギリスに解放され、ザンジバルに定住した子ども奴隷のライフ・ヒストリーを書き残した記録には、次のような記載がある。あるニヤサ（Nyasa）の少年は、ヌゴニ（Ngoni）の最高首長ムペゼニ（Mpezeni）の脅威の下に置かれていた。戦闘が続く中、この少年は自らの母親と姉妹とともにメイズ畑で拉致されたことを悟った。彼はムペゼニの土地にしばらく留め置かれて、ヤオ（Yao）の奴隷商人に売られた。この少年は、何度かヤオ商人の間で転売されながらヤオの首長の町で2年間を暮らすうちにヤオの言葉を習い覚えた。やがて別の買い手がついて海岸へ運ばれた。キルワの海岸ではアラブ人に売られ、マンゴー売りの仕事をさせられるうちにスワヒリ語を身につける。今度は、マスカットのアラブ人に売られ、マスカットへ向かう途中イギリス海軍の船（1隻は蒸気船、1隻は帆船）に発見されたのである。アラブ人は逮捕されてダウ船からおろされ、奴隷を運んでいたダウ船はイギリス海軍によって沈められた。少年たちはザンジバルへつれていかれてUMCA ミッション（University's Mission to Central Africa）に預けられたというのである⁴⁵⁾。

また、1937年に『奴隷の少年から牧師へ』（*Slave Boy to Priest*）を著したパドレ・ペトロ・キレクワ（Padre Petro Kilekwa）は、自らの経験を次のように語っている。キレクワの家は現在の北西ザンビアにあたるバングエルル湖（Lake Bangwelulu）の近くにあった。この地方では奴隷の略奪がしばしば行われていたようである。キレクワがはじめて拉致されたとき、母親が沿岸の奴隷商人から買い戻そうとしたが、それに必要な8ヤードのキャラコを調達できなかった。キレクワは、ヤオランドのムウェンベ（Mwembe）に暮らしていた間に何人も持ち主が変わり、最後にはキルワの南のミキンダニ（Mikindani）に送られ、ダウ船で海岸にそって北へ運ばれた。次いで、大型のダウ船に積み替えられて何日もかけて航海し、マスカット付近を通過して、ペルシャ湾のある港に到着した。アラブ人の船員の指示で下の船倉に移されたが、奴隷貿易の監視にあっていたヨーロッパ人による捜索を受け、発見される。奴隷は数日間近辺の島に収容された。マスカットに運ばれた奴隷は、イギリス領事館の宿泊施設に収容され、解放された。キレクワは水夫となり、海軍水兵として軍務にもついた。その後、キレクワはイギリスに渡って教育を受け、イギリス国教会の牧師として自らの天職を見つける幸運を得たのである⁴⁶⁾。

奴隷が運ばれる途中には、社会的なつながりの破壊と再形成がともなった。彼らの語りの中には、実際、血縁的なつながりの切断を感じさせるが、徐々に想像上の新たな血縁が生まれるのを見ることもあった。また、奴隷は、捕らわれた時から海岸で売られる時に至るまで母語（native language）を話すことができたものもいたが、内陸部から最終目的地までの移動中に新しい言語を習得しなければならなかったために母語をまったく失うものもいた。たとえば、キレクワは、ニヤサ語を習い、ニヤサの少年は途中でヤオ語を習得したが、あたかも自らの母語を失ったかのような印象を与えた。このような奴隷の経験は、アンゴラの奴隷貿易において言語獲得が重要であったことを別の資料によって確認することができる。たとえば、キンブドゥ（Kimbundu）は、内陸部から海岸への長い道中で奴隷の共通語（リングフランカ）となった。しかし、それぞれの奴隷の語りの中で欠落しているのは、海岸部の奴隷収容所（barracoon, holding pen）での経験である。劣悪な収容所の中で出身地の異なる奴隷が意思の疎通をはかるときには言語変容が促進されたと予想される。以上のように、奴隷は、捕らわれの身となった当初から目的地に輸送される間、自らの生存をはかるためにそれぞれの置かれていた状況に対して適応と調整が必要であったことがわかる⁴⁷⁾。

近年の大西洋奴隷貿易史研究で示唆されているように、「中間航海」は、ディアスポラ状態になったアフリカ人が自らの文化の記憶から切り離された「中間休止」（caesura）というよりも、それはむしろ捕らわれたときから試みてきた適応力がディアスポラの多様な場所で進化・拡張する契機となったと考えられている。奴隷が「中間航海」の経験を共有することで、未知の者（奴隷を含む）をアフリカ人家族の中に組み入れる「架空の血族」（fictive kinship）が想像される場合がある。別の表現をすれば、中間航海を生き延びた奴隷は文化変容（cultural transformation）のプロセスをはじめたことになる。これは船を離れる前の「クレオール化」（creolization）あるいは「ハイブリッド化」（hybridization）といえる。こうしたプロセスは、すでにアフリカ大陸を離れる前でも始まっていた。ミッションの少年の場合、このプロセスはキリスト教への改宗で終わる。すなわち、これはイギリスのミッションと東アフリカ海岸（スワヒリ）の社会文化規範の混合を受け入れることに一部基づいた異なる生活スタイルへの適合を指している⁴⁸⁾。

同様に、北西モザンビーク出身のヤオの女性であったスウェマ（Swema）は自らが新改宗者と認めたカソリック秩序の中に自らの家族的つながりを見出した。彼女は、1865年、10歳のときに借金の返済に困った母親に売り渡された。スウェマを買った人物は、アラブ人の奴隷キャラバンに売り払った。このキャラバンが海岸部へ向かう途

5 移行期のインド洋経済圏におけるアフリカ人の移動

中、ヤオランドの肥沃な土地を旅している間はミレット、豆、ジャガイモ、バナナなどの食事を与えられたが、そこを離れてルヴメ川（Ruvume）とキルワの間の乾燥したステップ地帯では、長く苦しい旅を経験した。スウェマは、東アフリカの主要な奴隷貿易港キルワの海岸に到着し、数日間休養を与えられた後、奴隷用のダウ船に乗せられてザンジバルの奴隷市場へ運ばれた。スウェマは、アラブ人の運営する奴隷市場で体が弱く商品価値がないと判断され、町外れの墓地で生き埋めにされかけたところを奇跡的に助け出されカトリックのミッションに運ばれたのである⁴⁹⁾。

インド洋奴隷貿易については大西洋奴隷貿易に匹敵するような海洋通商の記録はないが、利用可能な資料によれば、「中間航海」は喜望峰の東でもさほど異ならなかった。ヨーロッパ人とアラブ人の船の状態は悲惨なものであり、フランスによるモーリシャスへの奴隷貿易についてみると、18世紀においてその死亡率は大西洋奴隷貿易と同じくらいであった。メディナの観察でわかるように、奴隷となったアフリカ人は恐ろしく非人間的な中間航海の状況にもかかわらず、必ずしも拘束状態に屈従していたのではない。彼女の記録しているような抵抗の精神はヌガジジャ（Ngazidja）出身の17歳のコモロ人女性、マリアモ・ハリ（Mariamo Halii）の証言にあるように明らかであった。彼女は、ヌズワミ（Nzwami）の敵対する島出身のコモロの兵士によって拉致された。彼女と約30名の奴隷が運ばれた船は、嵐のためにムワリ（Mwali）で避難した。彼らには食料も水もなかったので、船長は食料を補給するために海岸へ出て行った。船に乗っていた子どもたちは、船長が視界から消えると船から飛び降りて海を歩いて海岸にたどりつき、内部の茂みに隠れた。

歴史家は、今では「船上の反乱」（shipboard revolt）がこれまで予想されていたよりも大西洋奴隷貿易のパターンと方法に影響した要因であったことを知っている。インド洋奴隷貿易についてはこれを明らかにする資料は少ないが、1788年7月23日に奴隷にされたマクア（Makua）は、フランス船の「ラリコルネ」（La Licorne）の船上で反乱を企てたことが記録されている。事実、大西洋奴隷貿易と同様にフランスの奴隷貿易商人は、さまざまなアフリカ人の集団を従順なものと抵抗的なものについて民族ごとに分類していた。したがって、1804年にモザンビーク島の奴隷市場で購入した多様なアフリカ人奴隷について書いているエピダリステ・コリン（Epidariste Colin）によれば、マクアは船上での反乱を扇動する傾向があったので、常に注意深く監視しなければならなかった⁵⁰⁾。

以上のように、奴隷になったアフリカ人が、自らをアフリカ人と考えたかどうかは別として、船上の反乱を通じて自らの従属的状态に抵抗しようが、あるいは中間航海

の苦難にじっと耐えようが、人間であるという認識を共有することを見失わなかったことである。アフリカ人が成人としてまたは子どもとして奴隷にされたかどうかという点、彼らの郷里から引き離されて直接に目的地に運ばれたかあるいは何度か主人と居場所を変えながら移動したかどうかという点、こうした要因に依存して奴隷のアイデンティティは変化しはじめ、少なくとも海岸への道や船上での経験によって複雑なものとなったと考えられる。中間航海においてアフリカ人は固有の文化遺産から継承したものを消し去ることはなかったし、そのプロセスで得た他の文化の要素も消し去ることはなかった。大西洋やサハラ砂漠を渡ったアフリカ人と同様にインド洋世界の目的地に到着したアフリカ人は自らの文化遺産をもち、自らが捕らわれてから外部の最初の目的地に着くまでに修得した文化の変化と調整の経験を持ってディアスポラとしての生活に備えたのである。

5 むすび ―本研究の今後の課題と展望―

アジア各地に散らばって暮らすアフリカ系アジア人に関する学問的関心は、近年になって主としてアフリカ系アメリカ人を主とするディアスポラ研究の発展から生まれたものである。しかし、アフリカ系アジア人社会に関する研究は、アフリカ系アジア人ディアスポラが一体何を意味するかについて明確な定義が行われる段階にはまだ達していない。今日まで幾多の研究が蓄積されてきたアフリカ系アメリカ人ディアスポラの経験に関する研究によれば、ディアスポラの主体的および客観的条件として次のような基本的な特質が指摘されている。「第1に、生まれ育った土地から外国あるいは周辺地域に追放され、逃れた先で比較的安定した社会を形成している。第2に、移住先の社会の支配的な集団には、「移住民」とその子孫を受入れ、同化させる意思がない。第3に、その結果、支配的社会集団から疎外され隔離される。第4に、「移住民」の形成した社会の中では、生まれ育った土地と社会から排除された体験や不公正な態度についての記憶に基づいた出自社会に対する認識が形成される。第5に、生まれ育った社会との結びつきを維持し、出自社会の生活改善のために貢献する意識的な努力が行われる。第6に、最終的には郷里に戻って再移住する願望がある。」これらの特質の中でもっとも重要なものは、ディアスポラの「意識」(diasporic consciousness)の形成である。そうした意識の形成要因として、劣位にある人々が地理的に集中して集団が形成されていること、支配的な集団とは著しく異なる生活条件と労働条件を共有していること、したがって支配的集団とは相反する利害が存在すること、などがあげ

5 移行期のインド洋経済圏におけるアフリカ人の移動

られる⁵¹⁾。

ところが、アフリカ系アジア人のディアスポラ意識の形成を考える場合には、アフリカ系アメリカ人ディアスポラとはその歴史的前提が異なるという指摘もある。すなわち、アジアにおける奴隷は、南北アメリカのプランテーションにはなかったような一連の伝統的に定められた権利と保護を享受し、奴隷の状態は、無慈悲で過酷なものではなかった。奴隷の中には自らの生活を所有者の裁量に全面的に委ねるものもいたが、自給用の耕作地を供与され、そこから自由に生活の糧を得ることを許された奴隷もいた。この場合には、彼らは収益の50%から75%を所有者に収め、残りは蓄積できたのである。時には、奴隷の中でも、名望家の邸宅の執事、商人、あるいは官吏として重要な地位につき、富と名声を得たものもいた。技術をもった奴隷に対する好待遇は、強制労働の下におかれている非奴隷職人の待遇よりも恵まれたものであった。インド洋を含む海洋アジアにおける奴隷制度では、奴隷が現地の社会から隔離されたり、疎外されるよりもむしろ同化することを促進する要因の下におかれていたことも重要である。これは、シャリア法の教えの下で奴隷のイスラームへの改宗と解放は賞賛されるというイスラーム社会の宗教的価値観によるものであった。

かつての奴隷の同化は、アジア諸国においては人種間の寛容さによって促進された。奴隷を取り締まる法律は、無視されることも多く、奴隷と自由民との間で性的関係が生じたとしても受入れられたのである。富裕層の女性が奴隷と結婚することもあった。たとえば、マダガスカルでは、女性の奴隷所有者が規律を破り、男性の奴隷をパートナーとすることもあった。イスラーム社会やヨーロッパの支配下にあったアジア人社会では、奴隷の兵士は軍務の後に解放されると、現地の女性と結婚し同化した。カルナタカのシディ（ヒンドゥ教徒）は、現地のヒンドゥ教徒と結婚した場合、イスラーム教徒やキリスト教徒のシディと比べてアフリカ人の特徴を残していないとの指摘もある。19世紀初期にイギリスの支配下にあったスリランカにおいて、「カフター」の兵士（アフリカ出身、具体的にはモザンビークとマダガスカル）がスリランカの女性と通婚したとしても、それは特異なことではなかったようである⁵²⁾。

以上のように、先行研究によればアジアにおけるアフリカ人奴隷の経済的および文化的衝撃は、南北アメリカのプランテーションや鉱山で働く奴隷のそれよりも多様であり、評価が難しい。たとえ奴隷の影響が識別できたとしても、どの側面がアフリカ人奴隷のもたらしたインパクトの結果であったのかを見定めることはなおさら難しいことである。また、アフリカ系アジア人社会は、アフリカ人の共通した郷里への思いとそれを示す遺産を識別させるものをほとんど残していない場合がある。アジアにお

けるアフリカ人がアフリカの郷土に帰還した事例を重ねて検討してみる必要があるだろう。現在のアフリカ系アジア人の社会には、同化過程が進行しており、アフリカへの帰還意識はあまり強くないという見方もある。むしろ彼らのインパワーメント戦略は、現地社会の中にニッチを見つけ出して存続をはかるという考えの方が強く現れているのかもしれない。現在、アジア社会においてアフリカ出身のアジア人の社会的および経済的エンパワメントをめざす戦略はその岐路に立たされていると言える。すなわち、アフリカ系アジア人はアフリカ系人として世界史の犠牲者たるディアスポラの構成員であるとの歴史認識を基本とすべきか、それともこのような見解をとることは誤っており、外部者としてのアフリカ系人のアイデンティティを強調することで帰属社会での統合への衝動を弱め、コミュニティ内部の摩擦を大きくし、低い地位にあるアフリカ系アジア人の社会的、経済的および文化的エンパワメントを覆しかねないとする認識を基本とすべきなのか、という問題に直面している。これらについて考えるためには、アフリカ系アジア人の存在に関する実証研究をなおいっそう重ねなければならない。

注

- 1) たとえば、世界銀行で刊行された次の書物を参照。Haru G. Broadman, *Africa's Silk Road: China and India's New Economic Frontier*, The World Bank, Washington DC, 2007.
- 2) 近年のグローバル化現象に関する歴史的研究としては、A.G. Hopkins ed., *Globalization in World History*, Pimlico, London, 2002. および A.G. Hopkins ed., *Global History: Interactions Between the Universal and the Local*, Palgrave, Hampshire, 2006. を参照。アジアにおけるアフリカ人ディアスポラの研究としては、Shihan de S. Jayasuriya and Richard Pankhurst eds., *The African Diaspora in the Indian Ocean*, African World Press, Trenton, 2003. Shihan de Silva Jayasuriya and Jean-Pierre Angenot eds., *Uncovering the History of Africans in Asia*, Brill, Leiden, 2008. Heike Raphael-Hernandez and Shannon Steen eds., *AfroAsian Encounters: Culture, History, Politics*, New York University Press, New York, 2006. ロナルド・シーガル、設楽國廣監訳『イスラームの黒人奴隷—もう一つのブラック・ディアスポラ—』明石書店、2007年、三島禎子「ソニンケにとってのディアスポラ—アジアへの移動と経済活動の実態—」(『国立民族学博物館研究報告』27巻1号、2002年、121-157ページを参照。最近、日本アフリカ学会学術大会においても在日アフリカ系人に関する調査研究が報告されている。(『日本アフリカ学会第45回学術大会 研究発表要旨集』2008年5月24日・25日、龍谷大学、51～56ページ)
- 3) スリランカでは、アフリカ出身者を「カフパー」と称する。S.de S. Jayasuriya, "The African Diaspora in Sri Lanka" in S.de S. Jayasuriya and R. Pankhurst eds., *The African Diaspora in the Indian Ocean*, N.J., African World Press, 2003, pp.251-288. Do., "Identifying Africans in Asia: What's in a Name?" *African and Asian Studies*, Vol.5, No.3-4, 2006,

5 移行期のインド洋経済圏におけるアフリカ人の移動

pp.281-289.

- 4) G. Campbell ed., *The structure of slavery in Indian Ocean Africa and Asia*, London, Frank Cass, 2004, pp.vii - xxxii.
- 5) たとえば、J.E. Harris, *The African Presence in Asia: Consequences of the East African Slave Trade*, Evanston, Northwestern U.P., 1971. を参照。
- 6) M. Ember, C.R. Ember and I. Skoggard eds., *Encyclopedia of Diaspora*, Vol.1, Plenum Publisher, N.Y., 2004, p.9.
- 7) D.K. Bhattacharya, "Indians of African origin", *Cahiers d'Etudes Africains*, 40, 1970, pp.579-582.
- 8) S.de S. Jayasuriya, "The African Diaspora in Sri Lanka", pp.252-260, 272-279.
- 9) H. Basu, "Slave, Soldier, Trader, Faqir: Fragments of African Histories in Western India (Gujarat)" in *The African Diaspora in the Indian Ocean*, pp.123-187, 223-249, S.de S.Jayasuriya, "Identifying Africans in Asia", pp.275-303. ヘレン・バスにはインドにおけるアフリカ系人史に関する多数の研究がある。Jayasuriya and Angenot eds., *Uncovering the History of Africans in Asia*, pp.173-174. の著作リストを参照。
- 10) そのような動向を示す最近の著作としては、以下のものをあげることができる。小林多加士『海のアジア—諸文明の「世界＝経済」—』藤原書店、1997年、弘末雅士『東南アジアの港市世界—地域社会の形成と世界秩序—』岩波書店、2004年、歴史学研究会編、責任編集村井章介『港町と海域世界』（シリーズ港町の世界史1）青木書店、2005年、家島彦一『海域から見た歴史—インド洋と地中海を結ぶ交流史—』名古屋大学出版会、2006年、小林道憲『文明の交流史観—日本文明のなかの世界文明—』ミネルヴァ書房、2006年。羽田正『東インド会社とアジアの海』（興亡の世界史15）講談社、2007年。
- 11) 近代世界経済の興隆とインド洋における交易ネットワークの変化およびアジアにおけるヨーロッパ人の出現については、Satish Chandra ed., *The Indian Ocean: Explorations in History, Commerce and Politics*, Sage, New Delhi, 1987. および Sushil Chaudhury and Michel Morineau eds., *Merchants, Companies and Trade: Europe and Asia in the Early Modern Era*, Cambridge, 1999. を参照。また、「離散共同社会」と「交易離散共同体」の概念および「異文化間交易」に関しては、フィリップ・カーティン著、田村愛理・中堂幸政・山影 進訳『異文化間交易の世界史』NTT出版、2002年を参照。（なお、本訳書の原著は、*Cross-Cultural Trade in World History*, Cambridge U.P., 1984. である。）注2) にあげた三島禎子のソニケ・ディアスポラの研究は、これらの諸問題をフィールドワークに基づいて明らかにしようと試みたものである。
- 12) この問題については、チョードリの古典的研究がある。K.N. Chaudhuri, *Trade and Civilisation in the Indian Ocean: An Economic History from the Rise of Islam to 1750*, Cambridge UP., 1985. また、最近、ジャネット・L・アブー＝ルゴド、佐藤次高・斯波義信・高山博・三浦徹訳『ヨーロッパ覇権以前—もうひとつの世界システム—』上・下、岩波書店、2001年が広く読まれている。（本訳書の原著は、*Before European Hegemony: The World System A.D. 1250-1350*, Oxford U.P., 1989. である。）
- 13) Paul Gilroy, *The Black Atlantic: Modernity and Double Consciousness*, Verso, 1993. 最近、本書の翻訳が出版された。ポール・ギルロイ、上野俊哉・毛利嘉孝・鈴木慎一郎訳『ブラック・アトランティック—近代性と二重意識—』月曜社、2006年。歴史研究としての大西洋

というパラダイムを検討した著作としては、バーナード・ベイリン著、和田光弘・森丈夫訳『アトランティック・ヒストリー』名古屋大学出版会、2007年を参照。アフリカ人ディアスポラの研究史展望については、以下の論稿が有益である。Emmanuel Akyeampong, “Africans in the diaspora: the diaspora and Africa”, *African Affairs*, Vol.99, No.395, April 2000, Paul Tiyambe Zeleza, “Rewriting the African diaspora: Beyond the Black Atlantic”, *African Affairs*, Vol.104, No.414, January 2005. Khalid Koser ed., *New African Diasporas*, Routledge, London, 2003. Paul Lovejoy and David V. Trotman eds., *Trans-Atlantic Dimension of Ethnicity in the African Diaspora*, Continuum, London, 2003. なお、Shihan de Silva Jayasuriya and Richard Pankhurst eds., *The African Diaspora in the Indian Ocean*, Africa World Press, Trenton, 2003. にもまとまった研究史が収められている。それに加えて「アジアにおけるアフリカ人ディアスポラ—その歴史的展望—」と題する特集が『アフリカ・アジア研究』に掲載された。“The African Diaspora in Asia: Historical Gleanings”, *African and Asian Studies*, Vol.5, No.3-4, 2006. 大西洋とインド洋におけるディアスポラの比較史の試みとしては、以下の論考が有益である。E.Alpers, “The African Diaspora in the Indian Ocean: A Comparative Perspective” in *The African Diaspora in the Indian Ocean*, pp.19-50. G. Campbell, “The African-Asian Diaspora: Myth or Reality?”, *African and Asian Studies*, Vol.5, No.3-4, 2006, pp.305-324.

- 14) これらの議論については、John C. Hawley ed., *India in Africa and Africa in India: Indian Ocean Cosmopolitanisms*, Indiana University Press, Bloomington, 2008. および Emma Christopher, Cassandra Pybus and Marcus Rediker eds, *Many Passages: Forced Migration and the Making of the Modern World*, University of California Press, Berkeley, 2007. を参照。なお、南アジア出身者のディアスポラについては、Crispin Bates ed., *Community, Empire and Migration: South Asians in Diaspora*, Palgrave, Basingstoke, 2001. を参照。
- 15) この3つの円の連鎖に重なるように海洋アジアにおけるポルトガル帝国の「インディア領」(Estado da India) が形成されたのである (図3を参照)。K.N. Chaudhuri, *Trade and Civilization in the Indian Ocean: An Economic History from the Rise of Islam to 1750*, Cambridge, 1985, pp.66, 82. また、プリトヴィシュ・ナグは、「インド洋システムの全体像を得るには、これまでの共通の関心事であったポルトガルの交易に関する研究とともに、東アフリカ沿岸についての補完的な研究が必要である」(Prithvish Nag, “The Indian Ocean, India and Africa: Historical and Geographical Perspectives”, in Satish Chandra ed., *The Indian Ocean: Explorations in History, Commerce and Politics*, p.151.) と述べ、ニールズ・ストリーンズガードは、「インド洋経済とヨーロッパを中心に台頭する世界経済の相互関係を評価するためには、インド洋の諸関係とその諸関係とインド洋周辺社会に対する相対的な重要性を明らかにする必要がある」(Niels Streensgaard, “The Indian Ocean Network and the Emerging World Economy, 1500-1750”, Satish Chandra ed., *The Indian Ocean: Explorations in History, Commerce and Politics*, p.127.) と論じた。また、アブデル・シェリフは、ブローデルの枠組みに準拠してインド洋海域史を構想したチョードリを評価しつつ、東アフリカ沿岸部を含めて西インド海域史研究の重要性を強調している。Abdul Sheriff, “Between Two Worlds: The Littoral Peoples of the Indian Ocean”, in Roman Loimeier and Rudiger Seesemann eds., *The Global Worlds of the Swahili: Interfaces of Islam, Identity and Space in the 19th and 20th Century East Africa*, Lit Verlag Berlin, 2006,

5 移行期のインド洋経済圏におけるアフリカ人の移動

- pp.15-31.
- 16) 詳細については、K.N. Chaudhuri, *ibid.*, pp.34-62. Niels Streeengaad, *ibid.*, pp.130-131. R. Austen, *African Economic History: Internal Development and External Dependency*, James Currey, London, 1987, pp.58-59.
 - 17) Niels Streeengaad, *ibid.*, pp.132-136. K.N. Chaudhuri, *ibid.*, pp.63-79. P. Nag, *op. cit.*, pp.157-164.
 - 18) Niels Streeengaad, *ibid.*, pp.139-140. K.N. Chaudhuri, *ibid.*, pp.80-81. P. Nag, *ibid.*, pp.165-166. 濱渦哲雄『世界最強の商社—イギリス東インド会社のコーポレートガバナンス—』日本経済評論社、2001年、35-43ページ。
 - 19) Niels Streeengaad, *ibid.*, pp.140-144. K.N. Chaudhuri, *ibid.*, pp.83-97. オランダ東インド会社に関する諸文献については、John Landwehr, *VOC: A Bibliography of Publications relating to the Dutch East India Company, 1602-1800*, Hes Publishers, Utrecht, 1991. を参照。また、イギリス東インド会社に関する初期の資料集としては、F.C. Danvers, *Letters received by the Easy India Company From its Servants in the East transcribed From the Original Correspondence series of the Indian Office Records*, Vol.1, 1602-03, London, 1896. を参照。
 - 20) R. Shimada, *The Intra-Asian Trade in Japanese Copper by the Dutch East India Company during the eighteenth century*, Brill Leiden, pp.5-8, 11-21.
 - 21) Niels Streeengaad, *ibid.*, pp.145-149.
 - 22) R.O. Collins, “The African Slave Trade to Asia and the Indian Ocean Islands”, *African and Asian Studies*, Vol.5, No.3-4, 2006, pp.325-326. したがって、17世紀までは、旅行者によって記録されたような記述資料しか残されておらず、それらと断片的なデータに基づいて最大数と最小数がせいぜい推定されるだけである。ただ、貿易、人口調査および軍務に対する黒人奴隷の需要などから間接的なデータは得られるので、それを利用すれば、アジアにおける奴隷貿易の多少信頼できる概括的なデータが得られるかもしれない。P.E. Lovejoy, *Transformations in Slavery: A History of Slavery*, 2nd ed., Cambridge U.P., 2000, pp.1-18, 24-29.
 - 23) R.O. Collins, *ibid.*, p.327. P. Lovejoy, *ibid.*, pp.155-158. なお、東アフリカからの奴隷貿易については以下の研究を参照。G. Campbell, “The East African Slave Trade, 1861-1895: The Southern Complex”, *International Journal of Southern African Studies*, Vol.21, No.4, 1988, pp.1-27. Do., “Madagascar and Mozambique in the Slave Trade of the Western Indian Ocean, 1800-1861”, in W.G. Clarence-Smith ed., *Economics of the Indian Ocean Slave Trade*, London, Frank Cass, 1989, pp.166-193. E. Medeiros, “Contribution of the Mozambican Diaspora in the Development of Cultural Identities in the Indian Ocean Islands”, M. Newitt, “Madagascar and the African Diaspora”, in *The African Diaspora in the Indian Ocean*, pp.53-80, 81-98. B. Nicolini, “The Makran-Baluch-African Network in Zanzibar and East Africa during the XIXth Century”, *African and Asian Studies*, Vol.5, No.304, 2006, pp.346-370. なお、鈴木英明「インド洋西海域と『近代』—奴隷の流通を事例にして—」『史学雑誌』第116編第7号、2007年7月、藍澤光晴「マダガスカルにおけるイスラム教—十二イマームシーア派コージャの過去と現在—」龍谷大学『経済学論集』第47巻第4号、2008年3月も参照。

- 24) R.O. Collins, *ibid.*, pp.327, 329. P. Lovejoy, *ibid.*, pp.29-36, 191-225. J.O. Hunwick, “Black Africans in the Islamic World: An international dimension of the Black Diaspora”, *Tarikh*, Vol.5, No.4, 1978, pp.22-37.
- 25) R.O. Collins, *ibid.*, pp.329-330. P. Lovejoy, *ibid.*, pp.216-223. イスラームについては、大塚和夫『イスラーム的—世界化の時代の中で—』日本放送出版協会、2000年を参照。
- 26) Jayasuriya and Angenot eds., *Uncovering the History of Africans in Asia*, pp.63-35.
- 27) エチオピアからインドへの移動については、R. Pankhurst, “The Ethiopian Diaspora: The Role of the Habshis and Sidis from Medieval Times to the End of the Eighteenth Century”, in *The African Diaspora in the Indian Ocean*, pp.189-221. L. Ingrams and R. Pankhurst, “Somali Migration to Aden from the 19th to the 21st Centuries”, *African and Asian Studies*, Vol.5, No.3-4, pp.371-397. R.O. Collins, *ibid.*, pp.335.
- 28) V.H. Aksan, “Ottoman Egypt” in P. Finkelman and C.J. Miller eds., *Macmillan Encyclopedia of World Slavery*, I, New York, Simon and Schuster Macmillan, 1998, p.285. R.O. Collins, *ibid.*, pp.335. P. Lovejoy, *ibid.*, pp.152-155.
- 29) R.O. Collins, *ibid.*, pp.336. また、G.P. Badgen, “Note In Lodovico de Var theme, Tarib in Egypt, Suria, Arabia Deserta and Arabia, Flix in Persia, Idia and Ethiopia A.D. 1503 to 1506”, translated by I.W. Jones, London, Hakluyt Society, 1863. および T.Pires, *Suma Oriental, In the Suma Oriental of Tome Pires and the Book of Francisco Rodrigues*, I, translated by A.Z. Corteson, London, Hakley Society, 1944. を参照。
- 30) 鈴木英明前掲論文、8-9 ページ。
- 31) N. Worden and K. Ward, “Slave Trade: South East Asia”, in P. Finkelman and J.C. Miller eds., *Macmillan Encyclopedia of World Slavery*, II, New York, Simon and Schuster Macmillan, 1998, p.850. R.O. Collins, *ibid.*, pp.336-337. なお、G.W. Irwin, *Africans abroad*, New York, Columbia U. P., 1977. を参照。
- 32) 鈴木英明前掲論文に掲載されている参考文献。6-8 ページ。
- 33) Gwyn Campbell, “Slave Trades and the Indian Ocean World”, in John C. Hawley ed., *India in Africa and Africa in India*, Indiana University Press, Bloomington, 2008, pp.21-22.
- 34) Gwyn Campbell, *ibid.*, pp.22-23.
- 35) Gwyn Campbell, *ibid.*, pp.23-24.
- 36) Gwyn Campbell, *ibid.*, p.24. 鈴木英明前掲論文 10 ページ。
- 37) Gwyn Campbell, *ibid.*, pp.24-25.
- 38) N. Worden, *Slavery in Dutch South Africa*, Cambridge U.P., 1985, pp.41-51. R.O. Collins, *ibid.*, pp.337.
- 39) 鈴木英明前掲論文 18-24 ページ。
- 40) A. Sheriff, *Slaves, Spices and Ivory in Zanzibar: Integration of an East African Commercial Empire into the World Economy, 1790-1873*, James Currey, London, 1987, pp.35-76. R.O. Collins, *ibid.*, pp.338. なお、ダウ船とザンジバル交易については、E. Gilbert, *Dhows and the Colonial Economy of Zanzibar, 1860-1970*, James Currey, London, 2004. を参照。
- 41) G.S.P. Freeman-Grenville, “The Coast, 1498-1840” in Do., *The Swahili Coast, 2nd to the 19th Centuries: Islam, Christianity, and Commerce in East Africa*, London, 1988. R.O. Collins, *ibid.*, pp.339. 富永智津子『スワヒリ都市の盛衰』山川出版社、2008年、45～58 ペ

5 移行期のインド洋経済圏におけるアフリカ人の移動

ージ。

- 42) R. Austen, *op. cit.*, pp.60-63. R.O. Collins, *ibid.*, pp.340.
- 43) 19世紀の南部および東部アフリカの社会変動については、E. Isichei, *A History of African Society*, Cambridge U.P., 1997, pp.409-423, 433-448. R.O. Collins, *ibid.*, pp.340. P. Lovejoy, *ibid.*, pp.233-237. 大湖地方の奴隷制と奴隷貿易については、Henri Medard and Shane Doyle eds., *Slavery in the Great Lakes Region of East Africa*, James Currey, Oxford, 2007. を参照。
- 44) Emma Chirtopher, Cassandra Pybus and Marcus Rediker eds., *Many Middle Passages: Forced Migration and the Making of the Modern World*, University of California Press, Berkely, 2007, pp.1-2.
- 45) Edward A. Alpers, “The Other Middle Passage: The African Slave Trade in the Indian Ocean”, in Emma Chirtopher, Cassandra Pybus and Marcus Rediker eds., *Many Middle Passages*, pp.26-27. A.C. Madan, trans. and ed., *Kiungani; or, Story and History from Central Africa. Written by Boys in the School of the University’s Mission to Central Africa*, London, George Bell and Sons, 1887.
- 46) Edward A. Alpers, *ibid.*, pp.29-31. Pertro Kilekwa, *Slave Boy to Priest: The Autobiography of Padre Petro Kilekwa*, trans. From Chinyanja by K.H. Nixon Smith, London, University’s Mission to Central Africa, 1937.
- 47) Edward A. Alpers, *ibid.*, p.34.
- 48) Edward A. Alpers, *ibid.*, pp.34-35.
- 49) Edward A. Alpers, *ibid.*, pp.21-22.
- 50) Edward A. Alpers, *ibid.*, p.35.
- 51) E. Alpers, “The African Diaspora in the Indian Ocean: Comparative Perspective”, in *The African Diaspora in the Indian Ocean*, 2003, pp.19-50. G. Campbell, “The African — Asian Diaspora: Myth or Reality”, *African and Asian Studies*, Vol.5, No.3-4, 2006, pp.305-318. P. Boomgaard, “Human capital, slavery and low rates of economic and population growth in Indonesia, 1600-1910”, in G. Campbell ed., *Structure of slavery in Indian Ocean Africa and Asia*, London, Frank Cass, 2004, pp.83-96. A. Reid ed., *Slavery, Bondage and Dependency in Southeast Asia*, St. Lucia, University of Queensland Press, 1983. G. Campbell, “Slavery and fanompoana: the structure of forced labour in Imerina (Madagasucar), 1790-1861”, *Journal of African History*, Vol.29, No.2, 1988, pp.563-486. G. Campbell, *An economic history of Imperial Madagascar, 1750-1895: The rise and fall of an island empire*, Cambridge, Cambridge U.P. 2004.
- 52) 以下の文献を参照。S.S. Ali, *The African dispersal in the Deccan from medieval to modern Times*, Hyderabad, Orient Longman, 1996. H. Basu, “Slave, Soldiers, Traders, Faquir: Fragaments of African Histories in Western India (Gujarat)”, S, de S. Jayasuriya, “African Diaspora in Sri Lanka”, in S, de S. Jayasuriya and R. Pankhurst eds., *The African Diaspora in the Indian Ocean*, Trenton, N.J., Africa World Press, 2003.

第2部 アジアと世界の出会い

主要文献一覧 (アルファベット順)

日本語文献

- 藍澤光晴「マダガスカルにおけるイスラム教—十二イマームシーア派コージャの過去と現在—」龍谷大学『経済学論集』第47巻第4号、2008年3月
- アブー＝ルゴド、ジャネット・L、佐藤次高・斯波義信・高山博・三浦徹訳『ヨーロッパ覇権以前—もうひとつの世界システム—』上・下、岩波書店、2001年
- ベイリン、バーナード著、和田光弘・森丈夫訳『アトランティック・ヒストリー』名古屋大学出版会、2007年
- カーティン、フィリップ著、田村愛理・中堂幸政・山影 進訳『異文化間交易の世界史』NTT出版、2002年
- ギルロイ、ポール、上野俊哉・毛利嘉孝・鈴木慎一郎訳『ブラック・アトランティック—近代性と二重意識—』月曜社、2006年
- 羽田正『東インド会社とアジアの海』（興亡の世界史15）講談社、2007年
- 濱渦哲雄『世界最強の商社—イギリス東インド会社のコーポレートガバナンス—』日本経済評論社、2001年
- 弘末雅士『東南アジアの港市世界—地域社会の形成と世界秩序—』岩波書店、2004年
- 小林多加士『海のアジア—諸文明の「世界＝経済」—』藤原書店、1997年
- 小林道憲『文明の交流史観—日本文明のなかの世界文明—』ミネルヴァ書房、2006年
- 三島禎子「ソニンケにとってのディアスポラ—アジアへの移動と経済活動の実態—」（『国立民族学博物館研究報告』27巻1号、2002年
- 村井章介『港町と海域世界』（シリーズ港町の世界史1）青木書店、2005年
- 大塚和夫『イスラーム的—世界化の時代の中で—』日本放送出版協会、2000年
- シーガル、ロナルド、設楽國廣監訳『イスラームの黒人奴隷—もう一つのブラック・ディアスポラ—』明石書店、2007年
- 鈴木英明「インド洋西海域と『近代』—奴隷の流通を事例にして—」『史学雑誌』第116編第7号、2007年7月
- 鈴木健夫編『地域間の歴史世界—移動・衝突・融合—』早稲田大学出版部、2008年
- 富永智津子『スワヒリ都市の盛衰』山川出版社、2008年
- 家島彦一『海域から見た歴史—インド洋と地中海を結ぶ交流史—』名古屋大学出版会、2006年

外国語文献

- Akyeampong, Emmanuel, "Africans in the diaspora: the diaspora and Africa", *African Affairs*, Vol.99, No.395, April 2000.
- Alpers, E., "The African Diaspora in the Indian Ocean: A Comparative Perspective" in S. de S. Jayasuriya and R. Pankhurst eds., *The African Diaspora in the Indian Ocean*, Trenton, N.J., Africa World Press, 2003.
- Alpers, Edward A., "The Other Middle Passage: The African Slave Trade in the Indian Ocean", in Christopher, Emma Cassandra, Pybus and Marcus Rediker eds, *Many Passages: Forced Migration and the Making of the Modern World*, University of

5 移行期のインド洋経済圏におけるアフリカ人の移動

- California Press, Berkely, 2007.
- Austen, R., *African Economic History: Internal Development and External Dependency*, James Currey, London, 1987.
- Basu, H., "Slave, Soldiers, Traders, Faquir: Fragaments of African Histories in Western India (Gujarat)", in S. de S. Jayasuriya and R. Pankhurst eds., *The African Diaspora in the Indian Ocean*, Trenton, N.J., Africa World Press, 2003.
- Boomgaard, P., "Human capital, slavery and low rates of economic and population growth in Indonesia, 1600-1910", in G. Campbell ed., *Structure of slavery in Indian Ocean Africa and Asia*, London, Frank Cass, 2004, pp.83-96.
- Broadman, Haru G., *Africa's Silk Road: China and India's New Economic Frontier*, The World Bank, Washington DC, 2007.
- Campbell, G. ed., *The structure of slavery in Indian Ocean Africa and Asia*, London, Frank Cass, 2004.
- Campbell, G., "The African-Asian Diaspora: Myth or Reality?", *African and Asian Studies*, Vol.5, No.3-4, 2006, pp.305-324.
- Campbell, G., "The East African Slave Trade, 1861-1895: The Southern Complex", *International Journal of Southern African Studies*, Vol.21, No.4, 1988,
- Campbell, G., "Madagascar and Mozambique in the Slave Trade of the Western Indian Ocean, 1800-1861", in W.G. Clarence-Smith ed., *Economics of the Indian Ocean Slave Trade*, London, Frank Cass, 1989.
- Campbell, G., "Slave Trades and the Indian Ocean World", in John C. Hawley ed., *India in Africa and Africa in India*, Indiana University Press, Bloomington, 2008.
- Campbell G., "The African - Asian Diaspora: Myth or Reality", *African and Asian Studies*, Vol.5, No.3-4, 2006, pp.305-318.
- Chandra, Satish ed., *The Indian Ocean: Explorations in History, Commerce and Politics*, Sage, New Delhi, 1987.
- Chaudhury, Sushil and Michel Mrineau eds., *Merchants, Companies and Trade: Europe and Asia in the Early Modern Era*, Cambridge, 1999.
- Chaudhuri, K.N., *Trade and Civilisation in the Indian Ocean: An Economic History from the Rise of Islam to 1750*, Cambridge UP., 1985.
- Christopher, Emma Cassandra, Pybus and Marcus Rediker eds., *Many Passages: Forced Migration and the Making of the Modern World*, University of California Press, Berkely, 2007.
- Collins, R.O., "The African Slave Trade to Asia and the Indian Ocean Islands", *African and Asian Studies*, Vol.5, No.3-4, 2006.
- Ember, M., C.R. Ember and I. Skoggard eds., *Encyclopedia of Diaspora*, Vol.1, Plenum Publisher, N.Y., 2004.
- Freeman-Grenville, G.S.P., *The Swahili Coast, 2nd to the 19th Centuries: Islam, Christianity, and Commerce in East Africa*, London, 1988.
- Gilbert, E., *Dhows and the Colonial Economy of Zanzibar, 1860-1970*, James Currey, London, 2004.

第2部 アジアと世界の出会い

- Hawley, John C. ed., *India in Africa and Africa in India: Indian Ocean Cosmopolitanisms*, Indiana University Press, Bloomington, 2008.
- Harris J.E., *The African Presence in Asia: Consequences of the East African Slave Trade*, Evanston, Northwestern U.P., 1971.
- Hopkins, A.G. ed., *Global History: Interactions Between the Universal and the Local*, Palgrave, Hampshire, 2006.
- Ingrams, L. and R. Pankhurst, "Somali Migration to Aden from the 19th to the 21st Centuries", *African and Asian Studies*, Vol.5, No.3-4, pp.371-397.
- Isichei, E., *A History of African Society*, Cambridge U.P., 1997
- Jayasuriaya, Shihan de S. and Richard Pankhurst eds., *The African Diaspora in the Indian Ocean*, African World Press, Trenton, 2003.
- Jayasuriaya, Shihan de Silva and Jean-Pierre Angenot eds., *Uncovering the History of Africans in Asia*, Brill, Leiden, 2008.
- Jayasuriya, Sde S., "Identifying Africans in Asia: What's in a Name?" *African and Asian Studies*, Vol.5, No.3-4, 2006, pp.281-289.
- Kilekwa, Pertro, *Slave Boy to Priest: The Autobiography of Padre Petro Kilekwa*, trans. From Chinyanja by K.H. Nixon Smith, London, University's Mission to Central Africa, 1937.
- Landwehr, John, *VOC: A Bibliography of publications relating to the Dutch East India Company, 1602-1800*, Hes Publishers, Utrecht, 1991.
- Lovejoy, Paul and David V. Trotmaneds., *Trans-Atlantic Dimension of Ethnicity in the African Diaspora*, Continuum, London, 2003.
- Lovejoy, P.E., *Transformations in Slavery: A History of Slavery*, 2nd ed., Cambridge U.P., 2000.
- Madan, A.C., trans. and ed., *Kiungani; or, Story and History from Central Africa. Written by Boys in the School of the University's Mission to Central Africa*, London, George Bell and Sons, 1887.
- Medard, Henri and Shane Doyle eds., *Slavery in the Great Lakes Region of East Africa*, James Currey, Oxford, 2007.
- Miller, J.C. eds., *Macmillan Encyclopedia of World Slavery*, II, New York, Simon and Schuster Macmillan, 1998.
- Nag, Prithvish, "The Indian Ocean, India and Africa: Historical and Geographical Perspectives", in Chandra Satish ed., *The Indian Ocean: Explorations in History, Commerce and Politics*, Sage, New Delhi, 1987.
- Nicolini, B., "The Makran-Baluch-African Network in Zanzibar and East Africa during the XIXth Century", *African and Asian Studies*, Vol.5, No.304, 2006.
- Pires, T., *Suma Oriental*, In the *Suma Oriental of Tome Pires and the Book of Francisco Rodrigues*, I, translated by A.Z. Corteson, London, Hakley Society, 1944.
- Raphael-Hernandez, Heike and Shannon Steen eds., *AfroAsian Encounters: Culture, History, Politics*, New York University Press, New York, 2006.
- Reid, A. ed., *Slavery, Bondage and dependency in Southeast Asia*, St. Lucia, University of

5 移行期のインド洋経済圏におけるアフリカ人の移動

Queensland Press, 1983.

Sheriff, Abdul, "Between Two Worlds: The Littoral Peoples of the Indian Ocean", in Roman Loimeier and Rudiger Seesemann eds., *The Global Worlds of the Swahili: Interfaces of Islam, Identity and Space in the 19th and 20th Century East Africa*, Lit Verlag Berlin, 2006.

Shimada, R., *The Intra-Asian Trade in Japanese Copper by the Dutch East India Company during the eighteenth century*, Brill Leiden, 2006.

Streensgaard, Niels, "The Indian Ocean Network and the Emerging World Economy, 1500-1750", in Chandra, Satish ed., *The Indian Ocean: Explorations in History, Commerce and Politics*, Sage, New Delhi, 1987.

Worden, N., and K. Ward, "Slave Trade: South East Asia", in P. Finkelman and Worden N., *Slavery in Dutch South Africa*, Cambridge U.P., 1985.

Zezeza, Paul Tiyambe, "Rewriting the African diaspora: Beyond the Black Atlantic", *African Affairs*, Vol.104, No.414, January 2005.